

自娛小錄

六

昭和六年十月二日浣起筆

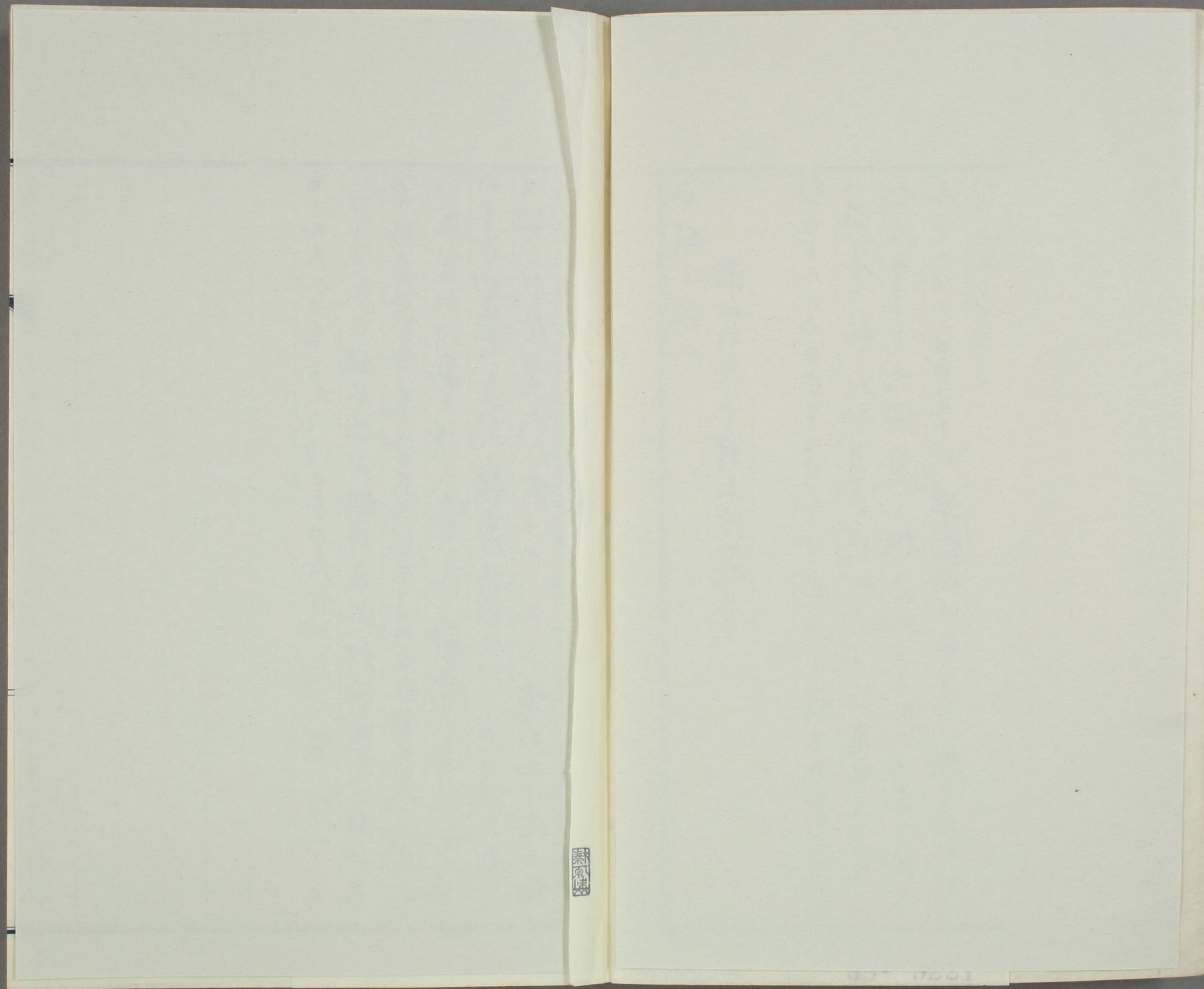
特別
14
1919
435



自娛小録六

昭和六年十月上浣起筆

のモールの日本その日くしと興味を持ち大要のその感
 小前巻に録しぬかまふの魚が各すれあつらふこと
 裁漢すると大隈侯に相見えれことか二ヶ和に出て
 ありこととを昔見しに早稲田の別荘に相見えれ記す
 小左の如くある



Small rectangular stamp or mark, possibly a library or archival label, located near the center fold on the left page.

第二十五回全國圖書館大會

郷土文化展覽會出品概目

(出品總點數ノ約四分ノ一)

十月

八日...招待日

九日...大會出席者觀覽

十日...十一日...十二日...

一般觀覽

會場

石川縣立圖書館
石川縣商品陳列所

國寶

(出陳ノ内諾ヲ受ケ目下文)
(部省ニ許可申請中ノモノ)

- 蒔繪角赤手宮 江沼 菅生石部神社藏
- 正親町院宸翰 江沼 菅生石部神社藏
- 陶製金剛童子立像 山代 醫王寺藏
- 墨漆製鞍 石川 白山比咩神社藏
- 白山記 石川 白山比咩神社藏
- 三宮古記 石川 白山比咩神社藏
- 神皇正統記 石川 白山比咩神社藏
- 白山宮莊嚴講中記錄 石川 白山比咩神社藏
- 沈金彫手宮 石川 白山比咩神社藏
- 蒔繪朱鞘大小刀 金澤 尾山神社藏
- 山水蒔繪料紙宮 羽咋 妙成寺藏
- 後奈良院宸翰 羽咋 氣多神社藏
- 前田利春畫像 鹿島 長齡寺藏
- 木像菩薩面 鳳至 重藏神社藏
- 木像男神像 珠洲 須々神社藏
- 兜・袖・臙當等 (賞盛着用) 小松 多太神社藏
- 大般若波羅密多經 長屋王筆 松任 本誓寺藏
- 支那禪刹圖式 金澤 大乘寺藏
- 阿彌陀三尊來迎圖 金澤 心蓮社藏
- 提婆達多畫像 鳳至 總持寺別院藏
- 前田利家夫人畫像 鳳至 總持寺別院藏

圖書

前田家ニ關スルモノ

書 卷利長痢

消 息利常筆

松雲公畫像

詩歌ノ幅 松雲公筆

蘆ニ鷺ノ圖 松雲公筆

梅墩集 松雲公

温故遺文

小松遺文

不二ノ圖 金龍院筆

秋野圖 (畫賛) 泰雲公筆

懷紙 (寄海祝) 眞龍院筆

手簡 (松雲公ヨリ山本源右衛門宛)

花橋ノ和歌 犬千代筆

本草通串 前田利保

寶生流能樂型付寫本 (全二十册ノ内) 前田利忠筆

鳥籠釘隱 (百工比照之内) 小堀遠州意匠

花籠釘隱 (百工比照之内) 小堀遠州意匠

郷土先賢ノ著述及筆蹟

蒙求 (文祿二年版) 小瀬甫庵

白根草 神戶友琴

正徳和韓唱酬錄 伊藤莘野

郷土志料

- 蘭文伊蘇普物語斷簡 (模寫) 山口爲範書
- 佩文齋書畫譜 (岡野黄石書入)
- 史記 (影宋慶元板) 市川米庵筆
- 鑄物師運上狀 仁安二年
- 古文書集 (承安五年國宣外)
- 一味同心起請文 鎌倉時代
- 貞意起請文 南北朝時代
- 碧巖錄 (總持寺版) 鎌倉時代
- 道元孤雲徹通三大尊行狀記
- 教書制札寄進狀 (足利尊氏以下歷代)
- 大乘寺中興記
- 後醍醐天皇十種勅問並奉答 瑩山禪師
- 瑩山清規 瑩山撰
- 能州太守畠山公之文書等
- 賦何船連歌 永祿七年
- 賦白河連歌 天正十五年
- 豊公手簡 (加賀局宛)
- 楠部芸臺碑文 賴山陽撰及筆
- 兼六園額 白河樂翁公筆
- 金澤大地圖 (文政時代)

參考書

- 古寫經 天平十二年
- 宋版佛說光明童子因緣經
- 宋版思益梵天問經
- 宋版佛說淨飯王般涅槃經
- 注千字文 弘安十年
- 法華經板木 應永二十二年
- 古文孝經 中原師富筆
- 金葉集 嵯川新左衛門筆
- 永樂大典
- 岷江入楚 (全五十五册ノ内)
- 八十一難經 天文五年
- 作庭記 後京極良經筆
- 徒然草 東愚筆
- 明月記 細川幽齋筆
- 原人論 (若州小濱版)
- 連詞新式 紹巴筆
- 飛鴻堂印譜
- 舜水文集 朱舜水
- 新撰字鏡 黒川春村筆
- ふるさと 僧良寛
- 大中道人漫稿 生田萬
- 拾遺集 頼和法師

美術・工藝

白山宮莊嚴講中記錄
沈金彫手宮
詩繪朱鞘大小刀
山水詩繪机
山水詩繪料紙宮
後奈良院宸翰
前田利春畫像
木像菩薩面
木像男神像
兜・袖・臙當等 (實盛着用)
大般若波羅密多經 長屋王筆
支那禪利圖式
阿彌陀三尊來迎圖
提婆達多畫像
前田利家夫人畫像

石川 白山比咩神社藏
石川 白山比咩神社藏
金澤 尾山神社藏
羽咋 妙成寺藏
羽咋 妙成寺藏
羽咋 氣多神社藏
鹿島 長齡寺藏
鳳至 重藏神社藏
珠洲 須々神社藏
小松 多太神社藏
松任 本誓寺藏
金澤 大乘寺藏
金澤 心蓮社藏
鳳至 總持寺別院藏
鳳至 總持寺別院藏

圖書

前田家ニ關スルモノ

書 卷 利長卿
消 息 利常筆
松雲公畫像 松雲公筆
詩歌ノ幅 松雲公筆
蘆ニ鷺ノ圖 松雲公筆
梅 墩 集 松雲公
温故 遺文
小松 遺文
不二ノ圖 金龍院筆
秋 野 圖 (畫贊) 泰雲公筆
懷 紙 (寄海祝) 眞龍院筆
手 簡 (松雲公ヨリ山本源右衛門宛)
花橋ノ和歌 犬千代筆
本草通 串 前田利保
寶生流能樂型付寫本 (全二十册ノ内) 前田利兜筆
鳥籠釘 隱 (百工比照之内) 小堀遠州意匠
花籠釘 隱 (百工比照之内) 小堀遠州意匠

郷土先賢ノ著述及筆蹟

蒙 求 (文祿二年版) 小瀬甫庵
白 根 草 神戸友琴
正徳和韓唱酬錄 伊藤幸野
韓客唱和詩並筆語 室鳩巢
庶物類纂 稻生若水
奚疑文集 大地昌言
謠曲諺解察形子 堀麥水
尙齒會記 富田景周
啓沃堂隨筆 (津田榮稟稿本)
玉洲文集 谷井玉洲
能登遊記 金子鶴村
年々々 留 錢屋五兵衛
清少納言枕草子別記 武屋元信
詩 書 王伯子
天平寺緣起 林道春
五 廂 圖 五十川剛伯
正法眼藏 (僧正山自序)
樂地堂號並記 堂號 席然杜多書
堂記 富田景周書

參考書

古 寫 經 天平十二年
宋版佛說光明童子因緣經
宋版佛說淨飯王般涅槃經
注 千字文 弘安十年
法華經板木 應永二十二年
古文孝經 中原師富筆
金 葉 集 蛭川新左衛門筆
永樂大典
岷江入楚 (全五十五册ノ内)
八十一難經 天文五年
作 庭 記 後京極良經筆
徒 然 草 東愚筆
明 月 記 細川幽齋筆
原 人 論 (若州小濱版)
連 誦 新式 紹巴筆
飛鴻堂印譜
舜水文集 朱舜水
新撰字鏡 黒川春村筆
ふるさと 僧良寛
大中道人漫稿 生田萬
拾 遺 集 頼和法師

美術・工藝

書 畫

寒山拾得ノ圖 長谷川等伯筆
湮 槃 圖 長谷川信春筆
源氏物語之圖 (小屏風) 俵屋宗達筆
楠公訣別圖 久隅守景筆
月ニ猿猴ノ圖 久隅守景筆
四季草花之圖 立林何用筆
楠公訣別圖 (古寶和尙贊) 狩野即譽筆
菅 公 像 宮崎友禪筆
白陽之圖 岸駒筆
踊布袋ノ圖 矢田四如軒筆
西園雅集 (旭莊贊) 山崎雲山筆
鷺 雁 圖 (對幅) 佐々木泉景筆
日ノ出之圖 佐々木泉景筆
加賀西南八景 金子鶴村筆

枯木叭々鳥之圖 小池智旭筆
 山水之圖 寺島應養筆
 青綠山水圖 東方芝山筆
 青綠山水ノ圖 柳原拙庵筆
 十六應真圖 吉田公均筆
 草花繪 (卷) 村山翠屋筆
 朝陽惠比壽圖 池田九華筆

陶磁

雲龍香爐 (傳唐代)
 吸坂燒布袋香合
 吸坂古九谷阿彌陀像 傳後藤才次郎作
 古九谷素描蘆雁ノ圖皿
 創始時代古九谷山水ノ繪小皿 傳守景筆
 吸坂古九谷丸文樣皿
 古九谷布袋ノ圖大平皿
 古九谷椿ニ鳩文樣長角皿
 献上古九谷幕古紋對鉢
 古九谷色繪染付入瓢形德利
 色繪古九谷松ニ鶴大平鉢 五郎大夫作
 琉璃古九谷木瓜形皿
 古九谷竹ニ虎染付中皿

描金

壽老青貝印籠 柳田元輔作
 布目地秋草蒔繪硯箱 五十嵐道甫作
 秋野之蒔繪硯箱 清水九兵衛作
 葛ノ細道蒔繪硯箱 清水源四郎作
 耕作蒔繪硯箱 宗澤作
 松ニ鶴蒔繪硯箱 隨甫作

髹漆

六歌仙三組盃 次五右衛門作
 鯰蒔繪大盃 次五右衛門作

木彫

能面 附屬六面 (文永年間) 赤鷲吉成作
 寒山拾得彫額 澤早忠平作
 花見遊山及萩ニ野馬ノ圖衝立 武田友月作
 双龍彫刀懸 武田友月作
 和合人木額 大野辨吉作
 天神像 松井乘運作

鑄金

螺蝶鈎付釜 初代寒雄作
 乙御前釜 橫河九左衛門作
 瓢形水盤 橫河九左衛門作
 鳳凰象嵌風爐 木越三右衛門作
 玄濤在銘金紫銅風爐 木越三右衛門作

染織

友禪染寶蓋模樣夜具

刀劍

短刀 加州眞景作
 短刀 則重作
 短刀 宇多國重作
 短刀 宇多國重作

九月 見

九月 菊 使氏神祭禮

十月 夷 講亥の子餅

十一月 袴着の飾 吹鞆祭

十二月 子 祭

追 儼 雪中行事

針 歲暮

枯木叭々鳥之圖 小池智旭筆
 山水之圖 寺島應養筆
 青綠山水圖 東方芝山筆
 青綠山水ノ圖 柳原拙庵筆
 十六應真圖 吉田公均筆
 草花 繪 (卷) 村山翠屋筆
 朝陽惠比壽圖 池田九華筆

陶磁

雲龍 香爐 (傳唐代)
 吸坂燒布袋香合
 吸坂古九谷阿彌陀像 傳後藤才次郎作
 古九谷素描蘆雁ノ圖皿
 創始時代古九谷山水ノ繪小皿 傳守景筆
 吸坂古九谷丸文樣皿
 古九谷布袋ノ圖大平皿
 古九谷椿ニ鳩文樣長角皿
 献上古九谷幕古紋對鉢
 古九谷色繪染付入瓢形德利
 色繪古九谷松ニ鶴大平鉢 五郎太夫作
 琉璃古九谷木瓜形皿
 古九谷竹ニ虎染付中皿
 藍古九谷式紙形皿
 春日山窯染付人物德利 青木木米作
 春日山窯青磁手焙 青木木米作
 春日山窯宋胡錄火入 青木木米作
 若杉窯椿洲作染付筆洗
 若杉窯染付手筒茶碗 本多貞吉作
 若杉窯染付水盤 山口素麴筆
 吉田屋窯槿花文樣菓子鉢
 民山窯赤繪細文樣水指 武田秀平作
 若杉窯赤繪鉢 三田勇次郎作
 小野窯赤繪小皿 藏六右衛門作
 赤繪細文人物大平鉢 齋田伊三郎作
 赤繪竹林賢人ノ圖水指 齋田伊三郎作
 宮本屋窯細文樣文具 (組) 飯田屋八郎右衛門作
 彩色樂陶大卓 粟生屋源右衛門作
 菊之繪 爐 椽 粟生屋作
 蓮代寺窯玉取獅子鉢 松屋菊三郎作
 人丸像 置物 永樂和全作
 彩色金襴大香爐 九谷庄三作
 櫻ニ慢幕文樣平鉢 九谷庄三作

金澤九谷山水繪德利 內海吉造作
 阿部窯遊鉞付細文樣花瓶 春名繁春作
 青九谷唐子置物 諏訪蘇山作
 柳蔭漁夫ノ繪平鉢 久保田米僊筆
 山水人物繪花瓶 (對) 狩野探令筆
 菊桐文樣平鉢 松本佐平作
 山水之圖額皿 友田安清作
 鳥 香 爐 初代大樋作
 雛形水指 初代大樋作
 赤茶碗 (竹徑箱) 初代大樋作
 扇形桃模樣菓子器 勘兵衛作
 淺野燒玳皮蓋寫天目茶碗
 槌ノ繪茶碗 山本與興作
 富士ノ繪茶碗 小原尾山作
 越中瀬戸在銘火入
 越中瀬戸茶入

木彫
 能面 附屬六面 (文永年間) 赤鷺吉成作
 寒山拾得彫額 澤阜忠平作
 花見遊山及萩ニ野馬ノ圖衝立 武田友月作
 雙龍彫刀懸 武田友月作
 和合人木額 大野辨吉作
 天神像 松井乘運作

鑄金

螺蝶鉞付釜 初代寒雄作
 乙御前釜 橫河九左衛門作
 瓢形水盤 橫河九左衛門作
 鳳凰象嵌風爐 木越三右衛門作
 玄濤在銘金紫銅風爐 木越三右衛門作

染織

友禪染寶蓋模樣夜具

刀劍

短刀 加州眞景作 則重作
 短刀 字多國重作
 短刀 字多國次作
 脇指 藤島友重作
 脇指 能州策則作
 刀 加州策若作
 刀 加州策則作
 脇指 加州策平作
 脇指 越中守高平作
 脇指 加州勝國
 短刀 加州策卷作
 薙刀 加州清光作

彫金

鉄紋透シ大學鐔 加賀與四郎作
 月ニ浪ノ圖小柄 後藤光昌作
 爲朝ノ圖小柄 後藤顯乘作
 群馬ノ圖小柄 後藤程乘作
 雲龍ノ圖小柄 後藤悅乘作
 加州象嵌霞ニ櫻ノ圖鐔
 雲龍ノ圖鐔 鈴木義敬作
 象嵌燭臺 加賀與四郎作
 刀 (大小) 拵付 平岡忠藏、水野友弘合作

藩政時代風俗年中行事

正月 具足鏡餅飾 (執政與村家ヨリ献上)
 飾葉・鶴の羽 天神堂飾
 歲徳飾 七草ノ式
 二月 宇迦祭 彼岸會
 三月 雛祭 花見
 四月 灌佛會 神事能樂
 五月 端午節句 笹
 六月 水室彌彦拂

春日山窯染付人物德利 青木木米作
 春日山窯青磁手焙 青木木米作
 春日山窯宋胡錄火入 青木木米作
 若杉窯椿洲作染付筆洗
 若杉窯染付手筒茶碗 本多貞吉作
 若杉窯染付水盤 山口素絢筆
 吉田屋窯槿花文様菓子鉢
 民山窯赤繪細文様水指 武田秀平作
 若杉窯赤繪鉢 三田勇次郎作
 小野窯赤繪小皿 藏六右衛門作
 赤繪細文人物大平鉢 齋田伊三郎作
 赤繪竹林賢人ノ圖水指 齋田伊三郎作
 宮本屋窯細文様文具(組) 飯田屋八郎右衛門作
 彩色樂陶大卓 粟生屋源右衛門作
 菊之繪 爐 椽 粟生屋作
 蓮代寺窯玉取獅子鉢 松屋菊三郎作
 人丸像 置物 永樂和全作
 彩色金襴大香爐 九谷庄三作
 櫻ニ慢幕文様平鉢 九谷庄三作
 金澤九谷山水繪德利 内海吉造作
 阿部窯遊鈺付細文様花瓶 春名繁春作
 青九谷唐子置物 諏訪蘇山作
 柳蔭漁夫ノ繪平鉢 久保田米僊筆
 山水人物繪花瓶(對) 狩野探全筆
 菊桐文様平鉢 松本佐平作
 山水之圖額皿 友田安清作
 鳥 香 爐 初代大樋作
 雛形水指 初代大樋作
 赤茶碗(竹徑箱) 初代大樋作
 扇形桃模様菓子器 勘兵衛作
 淺野燒玳皮蓋寫天目茶碗
 槌ノ繪茶碗 山本興興作
 富士ノ繪茶碗 小原尾山作
 越中瀬戸在銘火入
 越中瀬戸茶入
 越中丸山燒染付火鉢
 殖生燒竹亭黑茶碗
 銀七寶在銘酒吞 玄應自明作

描金

壽老青貝印籠 柚田元輔作
 布目地秋草蒔繪硯箱 五十嵐道甫作
 秋野之蒔繪硯箱 清水九兵衛作
 葛ノ細道蒔繪硯箱 清水源四郎作
 耕作蒔繪硯箱 宗澤作
 松ニ鶴蒔繪硯箱 隨甫作

髹漆

六歌仙三組盃 次五右衛門作
 鯨蒔繪大盃 次五右衛門作

彫金

能州兼則作
 加州兼若作
 加州兼則作
 加州家平作
 越中守高平作
 加州勝國
 加州兼卷作
 加州清光作
 鐵紋透シ大學鐺 加賀與四郎作
 月ニ浪ノ圖小柄 後藤光昌作
 爲朝ノ圖小柄 後藤顯乘作
 群馬ノ圖小柄 後藤程乘作
 雲龍ノ圖小柄 後藤悅乘作
 加州象嵌霞ニ櫻ノ圖鐺
 雲龍ノ圖鐺 鈴木義敬作
 象嵌燭臺 加賀與四郎作
 刀(大小) 拵付 平岡忠藏、水野友弘合作

藩政時代風俗年中行事

正月 具足鏡餅飾 (執政與村家ヨリ献上)
 飾葉・鶴の羽 天神堂飾
 歳徳飾 七草ノ式
 二月 宇迎祭 彼岸會
 三月 雛祭 花見
 四月 灌佛會 神事能樂
 五月 端午節句 笹粽
 六月 水室 彌彦拂
 七月 虫干 孟蘭盆會
 八月 夕見
 九月 菊使 氏神祭禮
 十月 夷講 亥の子餅
 十一月 袴着の飾 吹鞆祭
 十二月 子祭
 追儺 雪中行事
 針歳暮

○幸田成友の和英夜話の由、ブリッテワ、ミエセ
アム、高附巻を莫つて貴重者を贈り、これと云ふ
土産話がある。丁方幸田の北館を築く時、
此の貴重者の言を、飾りてある。高附巻を
取巻が、若れぬと云ふが、高附巻の二冊
共、イリエミチーテワト、マニエスクリ、ポロト、一冊
が、三万一千五、百、一冊、三万三千、百、我回
の金、換、三十一、萬、五、千、の、と、三十
三、萬、四、千、と、云ふ。日本、は、三、十、六、人、歌、集、が、二、冊、に
三十、萬、の、と、云ふ。此、の、由、に、便、に、歌、を、取、り、て、云、ふ、と、云、ふ
ら、る、が、日本、の、高、附、巻、が、大、概、に、分、割、り、て、買、つ
た、ら、ん、ん、の、公、衆、も、金、を、暮、つ、て、買、い、ん、と、云、ふ。

標原製

の、此、の、由、に、北、館、に、大、き、い、お、も、の、が、あ、る。英、回、の、此、の
貴、重、者、を、回、民、に、贈、り、て、回、の、出、入、の、と、云、ふ
の、由、に、一旦、競、り、入、札、に、附、り、て、モ、ル、ガ、ン、と、云、ふ、人、の、手、に
渡、ら、れ、る、を、ミ、エ、ゼ、ア、ム、の、モ、ル、ガ、ン、に、交、渉、し、代、金
は、十二、月、の、内、に、拂、ふ、と、云、ふ、約、束、に、保、留、し、て、ある、の、
由、に、モ、ル、ガ、ン、の、手、に、渡、ら、れ、る、と、云、ふ、が、
二十、餘、萬、の、高、附、巻、が、莫、れ、ん、と、云、ふ、此、の、由、に、
い、ん、ち、の、ミ、エ、ゼ、ア、ム、に、即、時、信、者、が、報、告、し、て、祈
禱、文、や、歌、を、集、め、れ、る、の、由、に、歌、を、採、り、て、
が、此、と、云、ふ、の、時、代、に、此、の、節、に、あ、る、の、由、に、莫、れ、
歴、一、年、固、を、と、り、て、ある。此、の、イ、リ、ミ、チ、ー、テ、ワ、ト、
マ、ニ、エ、ス、ク、リ、プ、ト、は、五、冊、五、冊、に、註、文、を、入、れ、た、美、

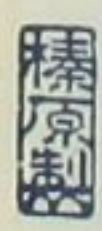
既にいふ如く日本の書物紙や扇面古字紙を比較
すべきことである。一冊のラットレル、サルトーは一二三
の四十年に及ぶといふから、疑ふ古紙が
あることはいふを待たぬ。他の一冊はハットフォード、
ホレーは尙未かやまゝい。此書の宣紙の持主ハ
英吉利王ヘンリー四世の弟三王子ヘッドフォード
公ジョージ、オブランカスターとあるといふ。ジョージがベ
ッドフォード公爵とあり、一四一四年折れたのみ一
四三五年あり、凡そ年代も推測せらる。此書の頁
の右端に「公爵の楯が描かれ、同一頁、下端に後年
本書を所蔵せしむりや、キヤビー（英王リチャ
ード三世の顧問官の徽章かあることゝす。是の日本

複製

びふふと内家私印の印のある、光厳皇后の御座る
といふべきものもある。西洋の貴室者と云ふても
日本と枚数おあもがある。譯かゝる。古もるんハ
リーミナーテワド、マニスリゴト。版本は、イン
キエナビラとお傍が、**校**つのである。此の古版本も
十五世紀の版木を信託するといふのである。我邦の
五山版書も**校**といふか、いふ。

ラットレル、サルトー、セベッポ、オードボレー、セ、
リエミ子、テワド、マニエスクリプトの複製心が、
此の複製と連した時代の作品か、而して、

かあることいふまでもあつてもんが、日時代の
優美なる心ある外も色々のあつても、地の富本
もろくもあつて限る特徴を挙げても、そのウラフ
トレル、サントウの畫の英國中世の生活特に農
民生活を現はしてゐることは、回頭の牛を使つ
て二人の百姓が田を耕してゐる圖、糸車を小脇に
した婦人が鳩籠とよる圖、餌を懸ける圖、
圍心の内へ羊の毛を刈る圖、騎士試合の圖、兵
船の圖、隻船の圖、オーマの峯の圖、際限があつ
た先が、恐らくは中世の英國を繪畫に示す
ことの中へ一流に位するものであつた。ベッドフォード
ホールの頭文字の中へ、頭部だけの古の像畫が



あつても、その數三つ、大部分は、英吉利人がさうです
か、えんざん山の方邊を集めた、よゝん地であつ
た、と云ふこと

○早稲田大寺の維持員を辞任したと思つたこと
は、再考するにあつたが、いろいろの事情で、物やんとして未
だ、うづつのが、念で辞任の概を得た。實は、そのの辞
任の出来さうな、主たる原因は、大隈侯が維持員
に、なつて我儘を云ふのが困るとあつた。そのを、抑へ
る、爲め、左任を由義とせん、とあつた。今、大隈
大隈侯も、誰か、辞任を由義とせん、とせん、と念で
辭表を提出し、せう、とせん、とせん、三人、高田、内と
あつた。初め、辭任の概を得た。その考、英人、連が

人物の栞底を先けぬことか何事なりを尋の主意を絶する
大七
まうらう。

○若し將軍家の御案内より先主立つる例と
て跣足で歩いたる身分の卑いよあハ勿論の
こと大名と雖も先法跣足で先主立つればと云ふ實
例を備へ加賀の松平公の例を讀んで得た。江戸城
が火上して其の後鳥を圍つた時松平公は天主閣の
復讐を擔當して後成りし時將軍自身捨合し
ぬれば官位先主立つて跣足で歩いたるは、この公の
例で入れたらむ或る時直侍も跣足に歩いたるは、
この公の例と大藩の太守も將軍の先主守口の例

合の形式がどこまでも守さるゝと見ゆる。

○石川公の同書飯大命の請渡に松平公の莫事
市談を添えしとて公の傳を執筆せん材料と
元神心と見ると、公は前田利家を祖とて五代に
當つてある。寛永二十年十一月十二日出生、享保
九年五月九日八十二歳に薨去である。公の名を
信紀と稱し、其父は光高公、母は將軍家光の養女
室の女三光園の姉君であるから公と光園公とい
叔姪の關係にある。公の荒れりし時金津の保科
正之が將軍の命を受けて後見をとり、且つ其母を
公に娶はせし。今では加賀といふ重なる關係がある。
公の莫事市談の大要は前巻に採られたが、是は補

足すべき事か一二ある。先が如何なる方面より圖書を
借り受けられたか、就ては、重なる箇所は

五山の海寺 南都 錫公の法親寺

武州祇園寺

朝仲法家公

近衛、七條、二條、一條、西三條、正親町

四辻、大炊持門、形島井、野宮、持明院

冷泉、坊城、その他がある。

武家の公が武家と離れた方面に圖書逸るをい
て、其の正しく考ふるべきも、圖書を蒐集するに大
同者彼を他るべき意氣あるは、このことが窺はれる。前
家にぬすむる文献に徴すると、法家公に於ける圖書

が僅かに一部さくさくといふは、其の差が甚なるは、永久
の損失であるから、是非副本をとり、可なり、必要が
あると云ふておる。此の「今々今の圖書跋の跋言
と直筆の異なる所が無い

吾人の編纂の如く、圖書を影寫し、跋を集め、其の
新し、加加の、何んの、考め、集め、疑わ
れ、つて、六道、衆の、考め、と、解する、もの、ある、が、決し
て、さう、むさう、つ、れ、弘通の、道、い、ろ、く、講、せ、し、て、お、れ
や、い、ち、ある、但し、古、時、の、考、考、を、執、する、こと、が、習、慣
を、し、て、お、れ、杉、雲、公、に、前、し、て、さ、う、傳、お、れ、て、貸、す
こと、を、昔、人、い、ろ、ろ、の、人、も、ある、赤、公、に、借、読、願、を
言、を、許、し、て、也、他、見、を、録、お、れ、に、許、し、て、お、い、こと、を、條

件と一に向きもある。公の要約を履んじ或る者に限
つては絶對に門外に出さざるべし此故也。又
志かへ六戸の取らぬ少くとも國書を貸し出し
あつたら、大日本史の加賀に頁山所が解少るるぬ
と云ふことも言ひ得らる。何れ君等が類從を編
纂するに就ても、林述斎の序の事を経るべく
公の勅書が役立つてゐる。新井白石の勅一七八特
別に貴重の圖書の貸借迄を許さんか、亦幕
府へ献せんと本七少くとも。免七すると公は借
貸者と惜んじたと云ふ説もあるけれども、天下二本と云
ふ稀散の圖書の矢籍に貸し出し得べきことのみ
ことを理解せぬはさうな、今この序の流人や田

時に柱をやら。

白石が五人に寄せる書中、加賀の天下の書齋也と云ふ
べりか、實にその通りである。

○山口の西野の行や一茶や夏目成美の洋書を
随時在館に寄せるを集めて一巻とせしむる
を副に位せる後、此人の文をよむと、余は此
人の筆致を愛する、彼が西野の一代男の源氏物語
の換骨脱胎をうけて、微に入り細に入り及んじ説
く不流なれども、一代男たる下れども、夏目成美
の心境を論じて上田秋成をたゞ傳へたを
ぬ、秋成の座談をも指し悩むか、時美の脚
疾ありて腰の上のうゝ憂ひを、不具の家田

くして心境の全くお反す。秋成はいち早く九日の暮るる成
美の心境は朗ううと絶へて不承あるを、彼人の
秋成は左袒七も、其美は左袒より、よきよき、
而して若者山口と耳を悩むよきよき考るに殆
人と通せぬ、此の訛り者二不具の者を挿へて彼是
の洋をさすよきよきと一笑す。

○皇座の回音機大合と臨まん者の十月八日の八時
五十分の汽車に投り一行二十名ばかり、さうして既やか
て女の死か、同じく、鐵道に、秋成が生いた。前夜の豪雨
と土砂の山崩れが、秋成を埋めたりを、田口驛に、夜に三
時半とさうして停車し、その終電を待つこととさうして
此間三時間、勿論夜の明けけり。九日の大合は、初日の



十時開合で、八時三十分到着の終電が狂つて、急行汽車
が後行汽車とさうして、十二時漸やくと、皇座の四
時開合を、秋成の考め、空しく、費し、終つて開合の式
も踏ちことか出来さうな。此の故障の考め、鐵道の
は焚出しをして、朝めしと、か、ハセ、又急行は、者、
秋成を、田口の雪中、故障の起り、言はれ、焚出
しの、厄な、さうして、急行の、秋成を、受け
たり、とい、皇座、い、ん、を、當つて、一、秋成、七、経、路、一、ま、い、こ
と、い、ある。

皇座に着き、此日の前夜の悪化を、この夜苦を、元
へ、此、其、日、の、物、に、角、地、か、あ、つ、た。地方文化展覧会を
観る、あ、る、市、長、の、お、待、合、に、臨、入、り、校、友、合、に、出、席

一、江戸、徳川、谷村、田、天、印、の、親、戚、石、運、傳、六、に、托、り、ん、て、
好、者、家、の、不、集、に、臨、ん、だ、り、し、て、托、侍、人、も、校、方、令、も、共、に、
中、産、し、し、こと、か、じ、し、を、得、無、つ、に、校、方、の、托、り、ん、だ、り、し、
此、中、の、一、快、び、自、令、の、席、上、に、往、年、大、隈、元、兵、衛、と、隨、伴、し、
来、に、際、の、市、の、横、山、幸、右、衛、門、中、務、傳、と、ら、の、再、見、歡、に、
校、方、の、托、り、ん、だ、り、し、て、今、の、荒、概、首、お、と、共、に、湯、院、を、し、
こ、し、此、の、最、選、年、が、選、考、史、上、稀、な、事、見、る、大、概、じ、
あ、つ、に、こ、し、を、い、ち、を、憶、ひ、起、し、て、舊、蹟、を、海、に、托、り、
の、令、を、催、し、し、を、月、攝、の、選、考、史、に、冬、謀、を、い、ち、
め、此、人、の、経、歴、を、の、政、務、の、こ、の、こ、し、を、い、ち、を、思、ひ、
且、僧、進、徳、の、念、を、深、め、し、し、
校、方、令、の、令、の、酬、え、ん、と、し、し、托、り、ん、だ、り、し、て、赴、い、た、家、の、友、人、

徳川

谷村、大、印、の、親、戚、石、運、傳、六、とい、ふ、市、北、の、舊、家、の、藥、
舗、と、い、ふ、名、の、家、の、家、の、事、也、自、令、の、印、の、頃、家、庭、薬、と、
し、帶、し、絶、や、ま、ら、ず、也、市、原、の、藥、部、書、と、馬、屋、田、の、
ゆ、り、藥、の、地、家、の、家、生、に、傳、り、し、よ、の、事、も、い、ち、を、い、ち、
和、の、地、主、の、傳、り、を、い、ち、し、し、十、と、藩、主、が、支、那、も、得、れ、秘、
法、を、民間、の、人、に、行、ふ、こと、を、庶、民、に、托、り、し、し、(此、家、の、家、生、)を、命、
し、た、ま、ひ、其、の、香、を、い、ち、し、し、文、献、を、も、示、さ、ん、だ、り、し、
屏、風、と、い、ふ、茶、室、の、五、十、家、の、種、の、目、料、料、か、ら、成、り、し、し、
人、と、あ、ら、ず、あ、ら、ず、茶、室、の、後、令、に、禮、節、の、こ、の、事、も、い、ち、
雪、を、い、ち、し、し、茶、室、を、考、え、し、し、を、は、用、し、し、し、
詳細、に、傳、り、し、し、他、に、高、は、提、建、常、能、内、と、い、ふ、子、の、
茶、室、も、い、ち、し、し、今、の、市、北、の、法、師、の、中、に、墨、守、一、人、を、

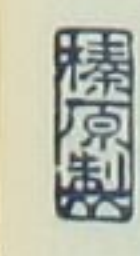
送してゐることもあつた。此の家の主人は物産の既成の人で
自分も武蔵・徳業の事を知りて居ると云ふので、此の
帯の春城邊の海を次ぎの朝寄せに、此家の洋紙に研
ぐのこぢり武十の物産を記し、願ふ物もあつた
稀款の回書も多く見られた。長崎の人々も
此家のものを多く見られた。此の物産を中々松
雲公が影写ししめられた。田舎本日本書にが板書
表紙も施し、そのものものと見られた。えんねの
影本の物の一端と見る標を、そのものものと
田中親英の複製もあつた。此の物産を各代々の家
が伝へて居つて、影写ししめられた。各代々の家
の影の痕と影写ししめられた。各代々の家

書影

あつたのも見え、一方の物産もよく見られた。此の物
産の影写し、分井書一本、村一太郎の影写し、此の物
産も影写し、其の物産もよく見られた。此の物産を
見られた。里本三物産の影写し、其の物産もよく
贈りを受けた。

○今宵の大合、就て石川三回寺の影写し、其の物
産の影写し、其の物産もよく見られた。此の物産を
見られた。里本三物産の影写し、其の物産もよく
贈りを受けた。

此といふが、その方、實に思ふべしである。恐らく石川氏の
文献の調査十三跋を初め、松倉公に關する種々の書
籍、御土關係の著書、御土商家の心算、美術工藝に
關する古画、陶磁、描金、彫刻、鑄金、刀劍、漆工、染織、
書道、茶室、酒器、和服、中、土、器、類、貴宗のよみか
あつて、進んで一覽するに、約二時間を要し、此位である。
前田家の大なる書を以つて日本書院の工芸部を組織
して文化を興へた遺蹟に實に偉大なる功を、列産
地、清の企て及ばぬといふべきである。自らの中
段、ある一巻、此の事、一から十までを記し、大なる感服
した。おもしろい物が、支那の一回の歴史、心、頭、入り、
り、清の書、再読を欲するところ。 十月十日、鎌倉



旅の終りに、
○鎌倉の旅行を記すに、天徳院と云ふ僧寺あり、住
持、一休、寺に、杉、堂、公、が、古、品、を、招、致、し、此、の、地、と、傳、く、ん
こゝろ、木、米、の、堂、跡、の、地、山、上、町、の、後、北、背、春、の、山、と
あると云ふ、上、山、川、町、記、(四)寺、の、書、何、友、縁、の、供、養、
塔、曹、が、ある。又、日本、に、於、て、始、め、て、研、寸、と、書、ふ、一、冊、
の、神、河、河、の、あ、つ、た、清、の、誠、の、書、卷、三、問、堂、玉、の、寺、
である。自らの先年、寒、雜、の、家、を、訪、れ、その、心、に
係、る、法、瓶、其、他、を、購、め、た、こと、が、ある、が、何、人、と、云
ふ、こと、も、若、し、の、家、教、を、證、さ、さ、す、の、に、此、の、鑄、又、ひ、あ、ら、う、
今、頃、の、丸、谷、の、お、お、ち、ろ、く、ま、の、ひ、び、今、ら、お、お、と、
大、橋、の、家、を、訪、れ、其、の、他、品、を、購、め、た。大、橋、の

旅の終りに、
○鎌倉の旅行を記すに、天徳院と云ふ僧寺あり、住
持、一休、寺に、杉、堂、公、が、古、品、を、招、致、し、此、の、地、と、傳、く、ん
こゝろ、木、米、の、堂、跡、の、地、山、上、町、の、後、北、背、春、の、山、と
あると云ふ、上、山、川、町、記、(四)寺、の、書、何、友、縁、の、供、養、
塔、曹、が、ある。又、日本、に、於、て、始、め、て、研、寸、と、書、ふ、一、冊、
の、神、河、河、の、あ、つ、た、清、の、誠、の、書、卷、三、問、堂、玉、の、寺、
である。自らの先年、寒、雜、の、家、を、訪、れ、その、心、に
係、る、法、瓶、其、他、を、購、め、た、こと、が、ある、が、何、人、と、云
ふ、こと、も、若、し、の、家、教、を、證、さ、さ、す、の、に、此、の、鑄、又、ひ、あ、ら、う、
今、頃、の、丸、谷、の、お、お、ち、ろ、く、ま、の、ひ、び、今、ら、お、お、と、
大、橋、の、家、を、訪、れ、其、の、他、品、を、購、め、た。大、橋、の

書を道家ハ一物に止まらぬと云へば、自分の讀み終るに
西所の長左衛門の家であつて、元が尤も投に傳ふを
みる。傳ふれば、一の書研で表面より山宮の中
を素焼くして佛の坐像をあらしめ、背に梵字
が一字白りスリてあらうとある。高麗掬すべ
き味がある。茶の居の舞臺に招へんといふ前
に、此の家の西洋文家の装飾は珍しく
く思ふ所の、中味コンソレートが外部に星沫か
塗つてあることがあつた。元ハ此の風は他
をいふと、主人の修つた。生浮の飲食店が自分
をまじせれば、グリ屋がある。涉野川のへつり
此つに閑雅の家は、川魚の文をなせる、刺すの位

梅も下りて、酒の口にもつた。京都の平ハ、此
すまき家と思ふ。加賀が有名なる湯は、山中山城と
とかある。きんぎょの湯は、行つて見る。横谷を湯るが、今
方、那谷湯と栗津湯とをえん。山中山城も此
附りともよから、湯は、此の湯宮の群とて
あるやうである。那谷の湯は、有名なる古利がある
那谷寺と云ふ。聖徳太子の御影が、昔も此家の家
のひまももも、きんぎょの湯は、昔も此家の家
である。他は加賀の湯は、昔も此家の家
しんといふ。その自動車が、往後二十里を
校友と共に、ドライブして、一息のあつた

○金澤に於いては、序に於ての上紙織道に試乗を以て
立ち十二日新居に入り、翌日糸原父老に一場の講演を
為さんと主紙に、此を日物を履人比のむある。今坊
ハ例の天朝山、乃ち糸原の継志園に、而して此の
此が四五十人の合衆が、中より耳順の宮合も多
多く交つておれ。余は、頼山陽に就て一時間、此の
講演を、試みた。講演終つて、同じ席に居る合衆が、
かゝつて、御堂と志きり、法話を交換し、研談、亦席を
山下の魚席に移し、十数人の紳人と深更まで、快談を
此の家余の家と、種々な、款待、頗るつとむ。今次
の、ゆゑ、得る左の資料、余の、從來、知らんと
料して、得るを得て、よき、関谷、其の、編

輯りて幕末までの改初年にかける沿革の大畧を
いふを得たりと云ふ幸と云ふも、水原に別前
の記しに継志園碑陰記を自序して推し
此記は先師星野垣徳士の撰ぶ所を宗家
主人の代つての心也、刻して園中に入つべきを其
まうの埋ちんあるを遺域とて、せめて其亭に刻

しと掲げ、改初年の園の歴史と云ふに依り折
々會々の人々も倚り思つて、歎のまを御友
に托して、この地をの懐香に特記を要せしこと
ある。此の御室の公を新中野の成文を尚書に
出席して余を示したるが、是れ水原の駿河三浦
島村が、外城堤親指記を記つた漢文、頼三村
の雄黄をかくれし、御土史料と云ふべきこと
ある。尚書が今も、野つた、一、市島屏山の
印譜がある。屏山の芝田旅訪前の一族が、文を
を好人の印の数を可なり、自刻が少く
まゝい。余も名を日田よ、此の印、宛から自分の
印と譜を見るか、いさ、親がある、と云ふて一笑

北。

○今更金洋行の序に、城後、由有、北の、新、開、上、城、
線、二、乗、つ、と、見、北、一、と、思、つ、北、か、ら、と、ある。自分、北、と、こ、を、往、後、
す、ま、も、夜、行、を、取、ら、さ、か、北、方、丈、一、白、書、の、乗、車、し、
北、二、三、の、換、換、や、凡、の、車、を、當、一、北、か、ら、と、ある。北、の、後、
ハ、カ、と、清、の、城、と、云、ふ、北、東、と、城、後、と、つ、ま、一、道、路、
と、自、分、の、着、い、頃、ハ、あ、か、く、北、の、道、を、往、て、東、東、と、往、
来、し、北、か、ら、一、思、い、去、の、多、い、道、路、が、ある。今、を、城、
路、の、敷、か、れ、の、一、有、場、か、ら、城、後、の、ち、つ、の、附、近、
の、宮、内、ま、い、一、定、時、守、持、の、料、二、事、の、間、を、往、つ、ま、一、九、年、
を、當、一、北、の、路、を、往、つ、ま、一、代、金、兵、を、
バ、チ、板、板、の、ち、つ、ん、か、ら、と、ある。自分、が、衆、議、院、に、過、り、

東京

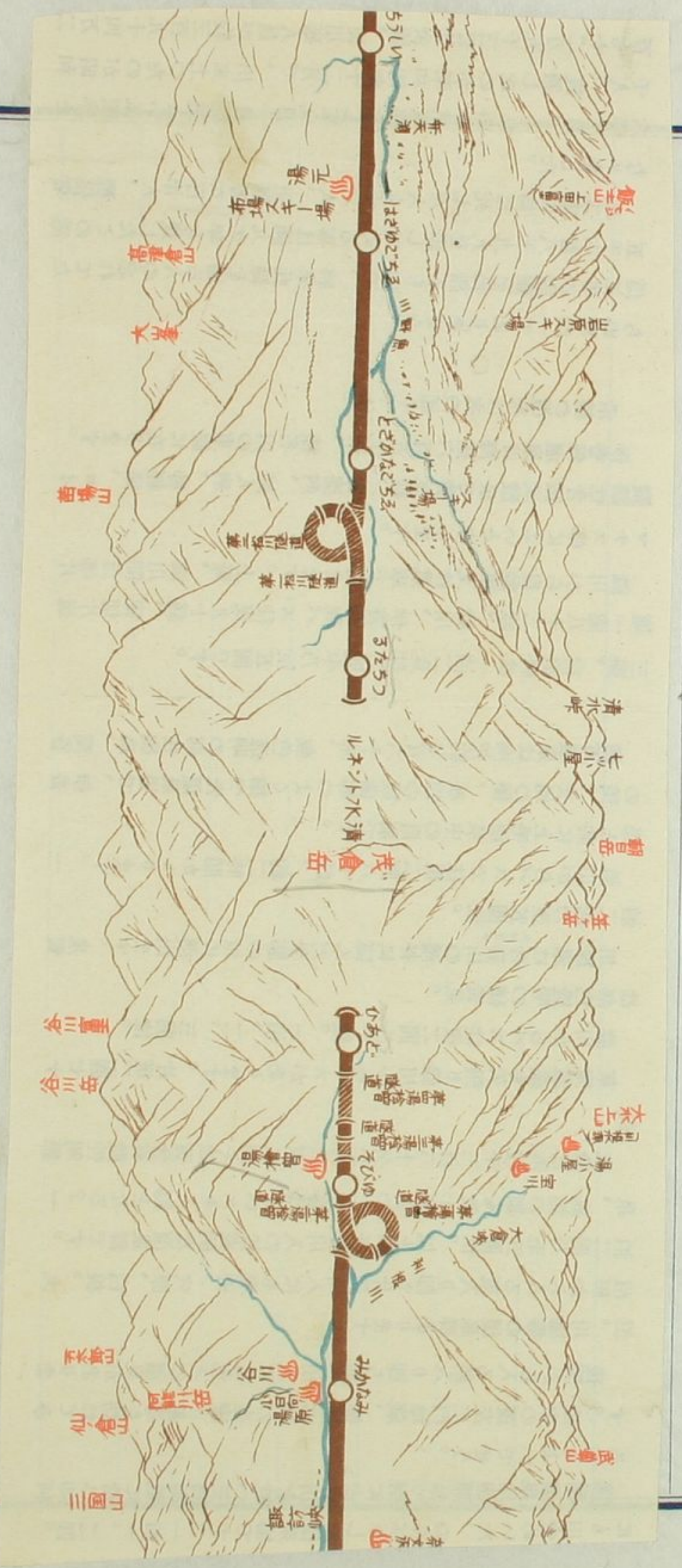
を、あ、り、北、の、路、に、城、後、(一)出、の、岡、村、長、が、同、僚、と、あ、つ、
て、北、人、が、執、心、に、北、の、城、(一)を、主、張、し、北、の、も、無、由、理、な、
い、城、後、を、東、京、ま、の、捷、路、の、こ、ん、と、優、る、もの、を、
い、か、ら、と、ある。あ、か、一、頃、を、往、つ、ま、一、北、の、こ、ん、と、と、
と、岡、村、の、主、張、が、容、易、く、行、い、ん、と、う、れ、の、も、優、
る、に、あ、る。免、三、角、行、城、後、と、北、の、こ、ん、と、の、同、時、の、節、
約、が、ある、から、四、條、文、に、北、の、利、便、と、並、つ、つ、も、
の、い、ち、ある。自、分、の、著、(一)急、行、心、北、の、一、時、十、分、に、
當、一、八、時、三、十、分、前、に、上、野、に、着、し、た。恐、ろ、北、の、後、
の、測、量、の、為、の、信、城、後、の、容、易、さ、の、お、お、お、を、受、
け、つ、つ、あ、ら、う。

北、の、路、の、往、復、ハ、北、田、も、あ、り、北、の、あ、ら、う、から、ま、く、ハ、お、

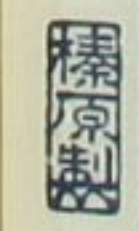
名深である。宮内から解名を尋ねて見ると、瀧を(飯
後の冠河が(ついで(ある)東(小千谷、川口(こゝろ)も飯後の冠
河(かつく)(あり(の(河(白土)(北出、清佐、五ノ町、六ノ町、
津、石打、湯沢(飯後)中里(飯後)を(いて(中里から
難所(しか(の(か、ループ式(の(懸(着)が(穿(れ(て(ある、
見(が(ね(川(ト(ン(子(ル(と(云(い(ん、(回(の(如(く(環(状(を(ま(す、
句(配(を(解(け(の(ル(フ(が(一(と(ある、(清(の(ト(ン(子(は
此(の(ル(フ(式(の(懸(着)を(解(く(玉(標(から(入(う(と(ある、
(玉(念)：(如(け(の(り(か(ある、(此(迄(丈(九(千(七(百(二(米(廿
三(セ(ン(チ(六(哩)に、(え(ん(が(東(洋(一(世(界(の(長(ト(ン(子(ん
の(弟(九(位(を(奪(つ(と(云(い(ん(と(ある、(此(の(ト(ン(子(ん(の中(は
分(水(嶺(も(回(境(も(別(境(も(ある、(の(一(首(と(す(ん(き(

瀧

此のトン子んは、昔年(明治十年八月)
に、詔書(の用(が(千(百(七(十(二(万(五(千(五(百(一(回)に(使用(の
に(人(員(が(約(四(百(人(と(、(約(一(百(五(十(大(敷(ひ(ある。

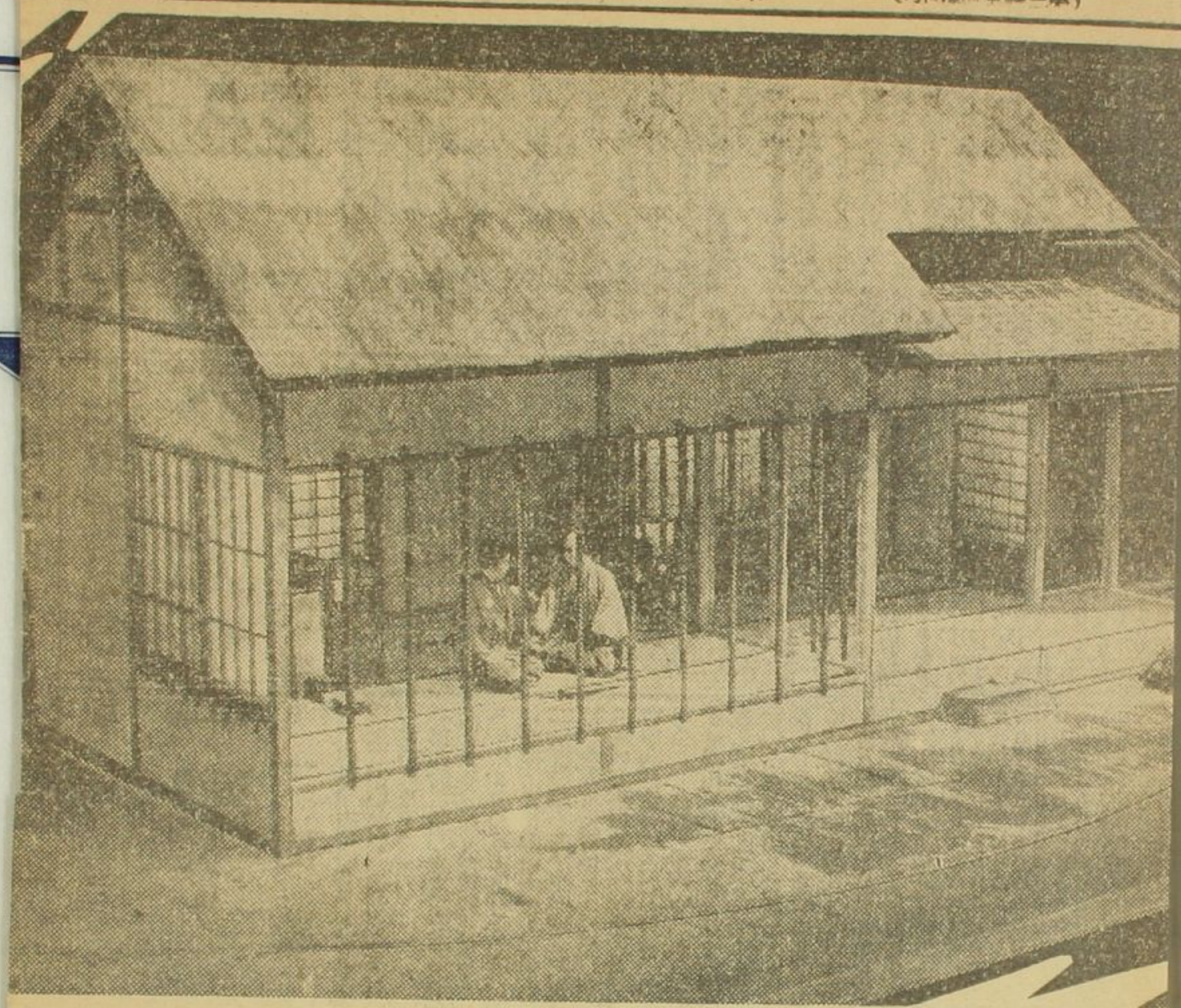


玉合をぬけ湯桶等におるまはしきる。一ノフ路二道が二三三四
とある。此の丈トニ子入りの時が五時迄。くわあつたか
は分り合書を入り。酒を煽る。まじり。旅行の旅と
話。人々も。去来。耽つて。昔。此を。行つて
此路の事。と。追憶。した。ま。頃。に。別。の。宿。の。宿。舎
と。い。お。粗。末。の。よ。の。ま。あ。か。ら。カ。エ。入。り。て。折。の。世。中
此。國。飲。を。毎。日。一。盞。つ。て。あ。ら。く。や。う。る。こ。と。を。あ。つ
た。旅。舎。の。飯。の。あ。つ。て。も。ま。い。り。も。味。増。法。を。終。末。の
て。中。に。入。り。れ。ば。ス。じ。が。甘。か。つ。た。の。ひ。あ。る。あ。る。年。の。雪。中
ま。を。は。め。て。新。路。の。ま。ま。ま。と。も。赴。い。た。時。る
ま。命。拾。ひ。を。し。た。横。に。此。道。路。の。あ。ら。か。ら。と。思。つ
人。星。を。ま。あ。つ。け。て。ま。ま。ま。や。り。自。分。の。或。る。道。伴。と

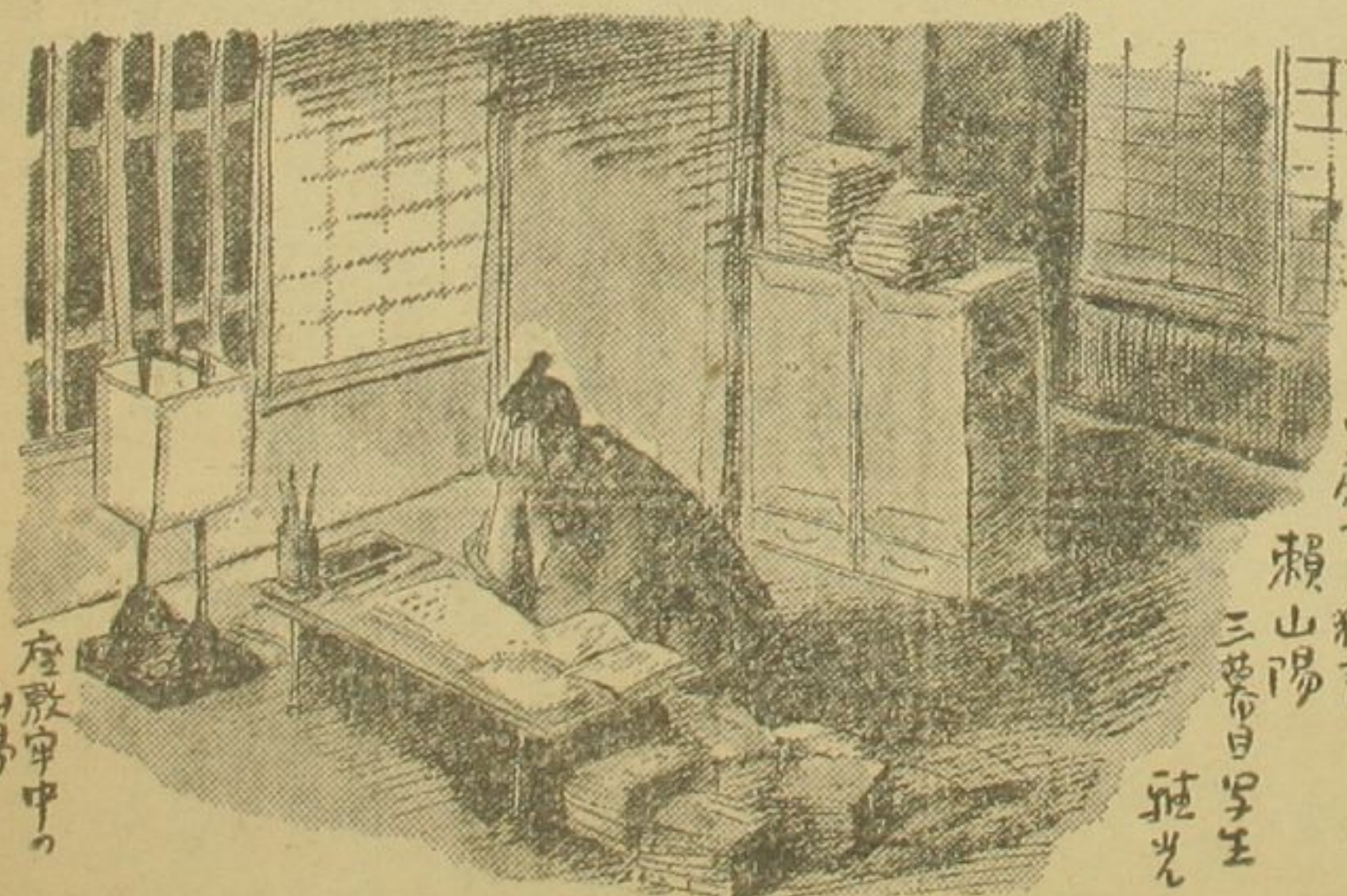


あ。と。から。道。伴。を。あ。ま。の。一。つ。つ。雪。路。を。行。く。と。い。つ
か。道。を。失。つ。て。候。と。察。み。に。下。り。終。り。お。屋。路
聖。の。道。と。お。れ。の。に。棟。然。と。い。は。ま。か。ん。人。語。か。目
ま。こ。え。る。の。を。考。を。路。り。の。呼。ん。だ。か。互。う。の。救。ひ
手。も。来。る。ら。う。に。か。三。十。分。程。ほ。と。自。分。の。備。の。れ
人。足。り。な。か。救。ひ。を。来。て。く。ん。だ。ま。時。の。道。伴。の。實
業。の。あ。ら。か。音。業。の。紙。幣。を。推。し。帯。し。て。あ。ら。か。地
誰。を。免。れ。ん。に。こ。と。を。い。ど。く。ま。こ。ひ。は。ら。に。着。る。と
と。共。に。祝。言。の。と。張。つ。た。こ。と。を。思。ひ。起。し。て。無。聊
と。思。つ。た。

信。州。の。風。景。の。無。極。味。に。い。つ。た。ま。あ。ら。か。地。の
後。の。山。河。の。日。景。然。先。か。南。道。を。見。る。こ。と。を。あ。ら。か



寫眞明——賴山陽の中の一畫面と美藝



山陽の
座敷中

偉人の母
賴梅颯女史

これに過ぎませぬ。
〇五十九年間の叙い日記
賴山陽が一代の通學であり、勤

帝劇十月狂言

賴山陽

三巻目

雅光

十五日封
切邦畫

〇『生活線
ABC』編
田原畫田中
絹代、及川
絹代、及川
絹代、及川

藤原

奴隷めがある。石打女史から清原、山陽とあはうかの
 光が、赤も赤も入った、危々入った山が黒く赤が白く、鐘
 の如き月が天に懸つて、~~書を~~人をして清原の威を
 怖とせしめた。此迄、たゞお家のよき家、貴い家
 等とさういふ、どんとあはうとさういふ、想像と死せ
 此の後、最も潤汗ひあふの、温あ地、笑いと
 別、言ふべき、遠く城道とよあてよ、程である。冬
 動きのスキー、さういふ、さういふ、特未此の後
 が、赤も赤も入った、
 十月十五日記



十月帝劇 本格的に力強い新史劇 泣かされた『頼山陽』

本山 荻舟

所謂史實に とらはれ過ぎると、平面描寫に墮し易い史劇である。史實に泥まらず創意をほし、いかにすると、いはゆる大衆受けはしても、裏づけられる力がないから、すこし物のわかっただけには、コト物として軽蔑される。史實を極めて、徹直して、一旦自家



の欄に吹き卸して、立體的に創造される史劇、それを本格的といふのである。今の劇作家中、この本格的に力強い作を提供してくれるのは、眞山青果氏一人といつても過言ではない。ト評者は度々信じてゐる。百年記念といふことで上演に非却された頼山陽は、いはゞ一種の傑作も兼ねた。しかも傑作はなれした佳作である。撰出しの作家に及ぶべからず、老功の作家といへども、一夜讀にはできぬ仕事である。

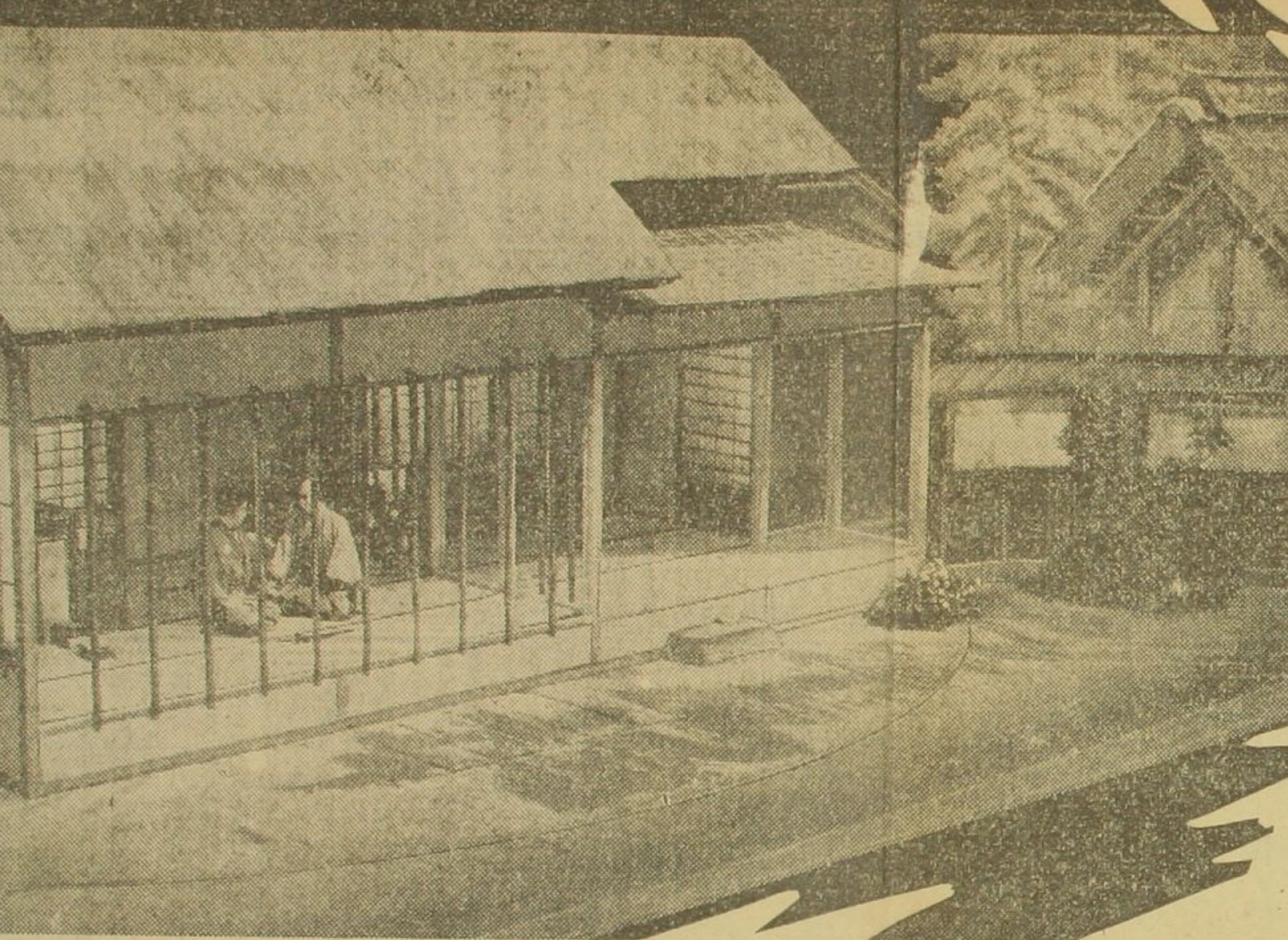


大詰春水の 書齋を省かれたが、時間的に不自然を生じたのは、作者のせいではなく、作者も本意ないこと、思ふ。左團次の山陽は、強ひて國士がらに官に半面たる風流才人の面影を失ひはしまいかと氣遣つたが、これは作を知らなかつた筈のきで、偶像



壽三郎の叔 父春水がいかに、極が過ぎるのと、大まかな變風で、最初の間は不向きなのではないかと思はれたが、三幕目の頼山陽の間で、不恰好な考つき

で、これ等の點は、この人に限らず、新史劇作家の常套手段だが、この意は利いて解を注ぎつけた。乞食はしうかである。二幕目は直ぐに演進されての形勢で、道の爲には主觀者の戀愛を棄て、運進しやうとする熱意と、愛憎人として脱却し難い煩悩と、極みつゝ團ひつづける場面が最後まで讀く。その間に日本外史は綴られるのである。



眞實明 頼山陽の中の一画面

の興味を惹きさせたと思ふ。頼山陽の石井は、思想、立脚を要しなから、あくまで山陽を敬愛する親友、頼子の頼山陽は同じ親友でも、やゝ俗奥をまぬかれぬところ、それゆゑに描かれてゐるのを、それゆゑに演説されてゐる。頼子の手島も、絶望感でよく、訂若の男が、ふだん以上はつきりと、力強くしてゐた。千代子の妹は、色どりで上役になつて居り、そして從順によくしてゐた。

青年時代の山陽

市川左團次談

この六月の末頃でした。私の知人で頼山陽の影に關係してゐる小田氏から話があつて、今年山陽の百年祭が行はれるから、山陽の劇を上演してどうかと願はれました。しかしながら、私が上演したいからといつて直ぐ實行出来るものではないので一應大谷社長に傳へるといふ事でも別れました。社長も氣になつて直ぐに賛成し眞山青果先生に脚本執筆を依頼されたのでした。頼山陽先生にも都合があつて延々となり、この十月興行に實現を見た次第です。私は山陽の晩年があること、思つて居りますと、案に相違して青年時代ばかりだったので、扮装に可成り苦しみました。山陽の肖像はほとんどすべてが晩年の、日本外史完成のものばかりです。町家の若旦那でなく、また武裝した侍ともいへない學者の青年時代です。一度脱走して捕らへられ、牢へ入れられた時は、頭髪をめちゃやくに切られてしまつたさうです。そこで拘禁室の場では、脱走のやうな顔にして居ります。



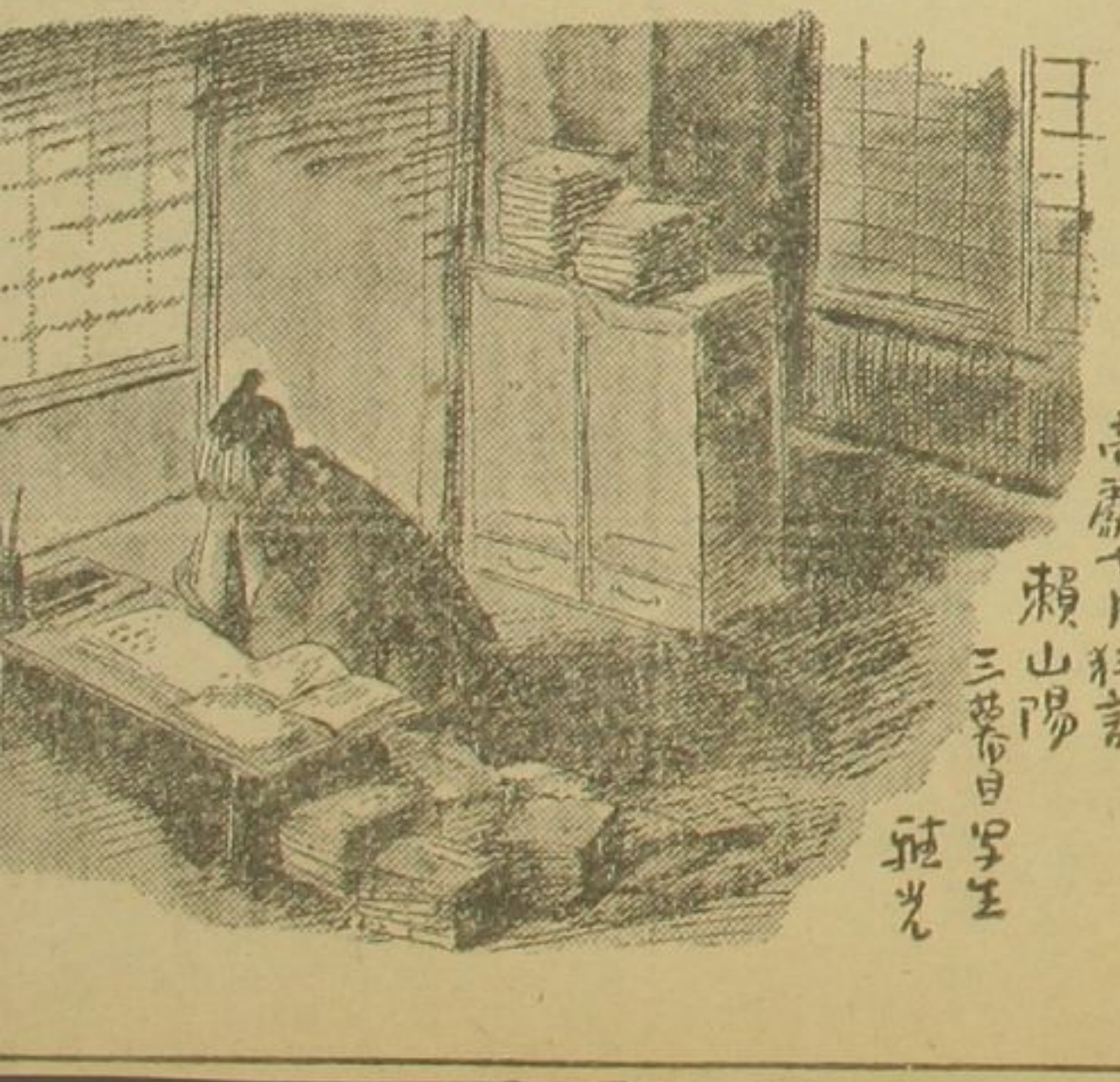
山陽、母節子 役末奈詞

來週の

第三週映畫は日本物は十五日、西洋物は十三日の封切である。内外映畫共に相當見ごたへのあるものがそろつてゐる。清田『生活線ABC』、日吉『大敵』、阪妻『雪の渡り鳥』、米コロンビア製作『實験映画』アフリカは『獨ヒザ・ウスニア映畫』トイカは『おの』異色ある作中である。

偉人の母 頼梅颯女史

〇五十九年間の思い出 頼山陽が一代の通學であり、勤



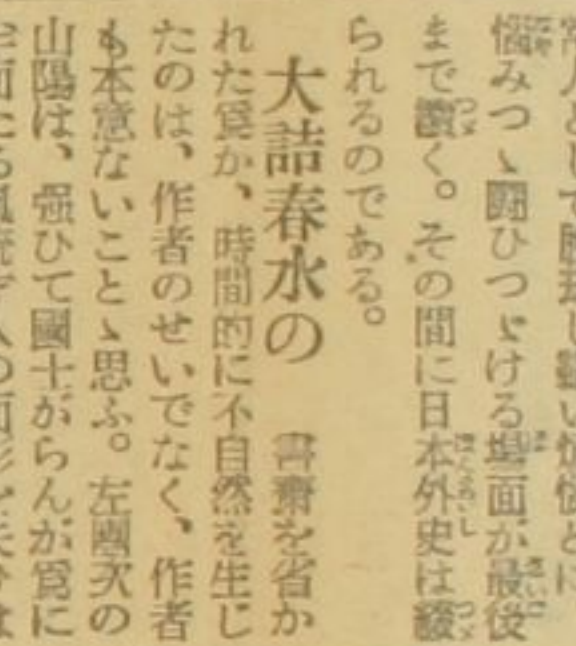
帝劇十月狂言 頼山陽 三五日学生 植光



★★★★★ 月帝劇 ★★★★★ 本格的に力強い新史劇 泣かされた『頼山陽』 本山 荻舟



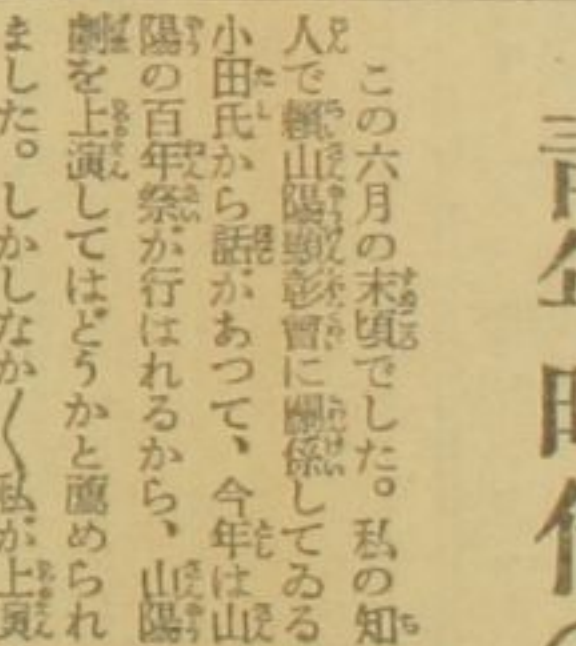
所謂史實に といはれ過ぎると、平面描寫に墮し易い史劇である。史實に泥まず創意をほし...



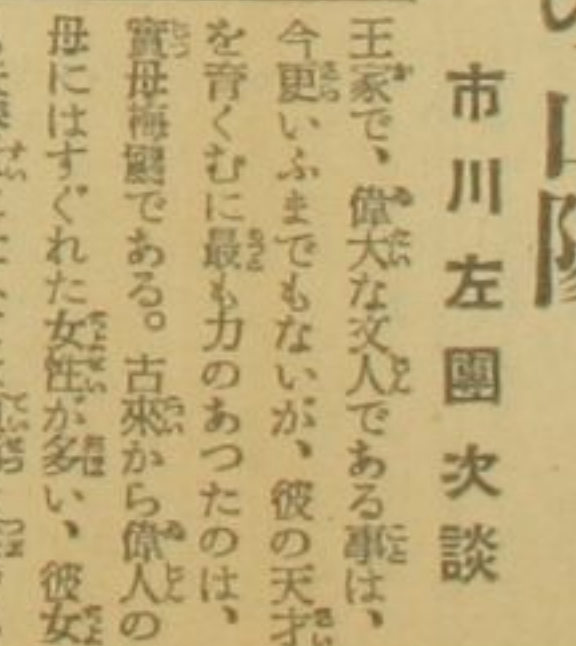
大詰春水の 書齋を省かれた。時間的に不自然を生じたのは、作者のせいではなく、作者も本意ないことと思ふ。



三郎の叔 父合母がい。病が大さ過ぎるのと、大まかな風で、最初の頃は不向きなのではないかと思はれたが、三郎の...



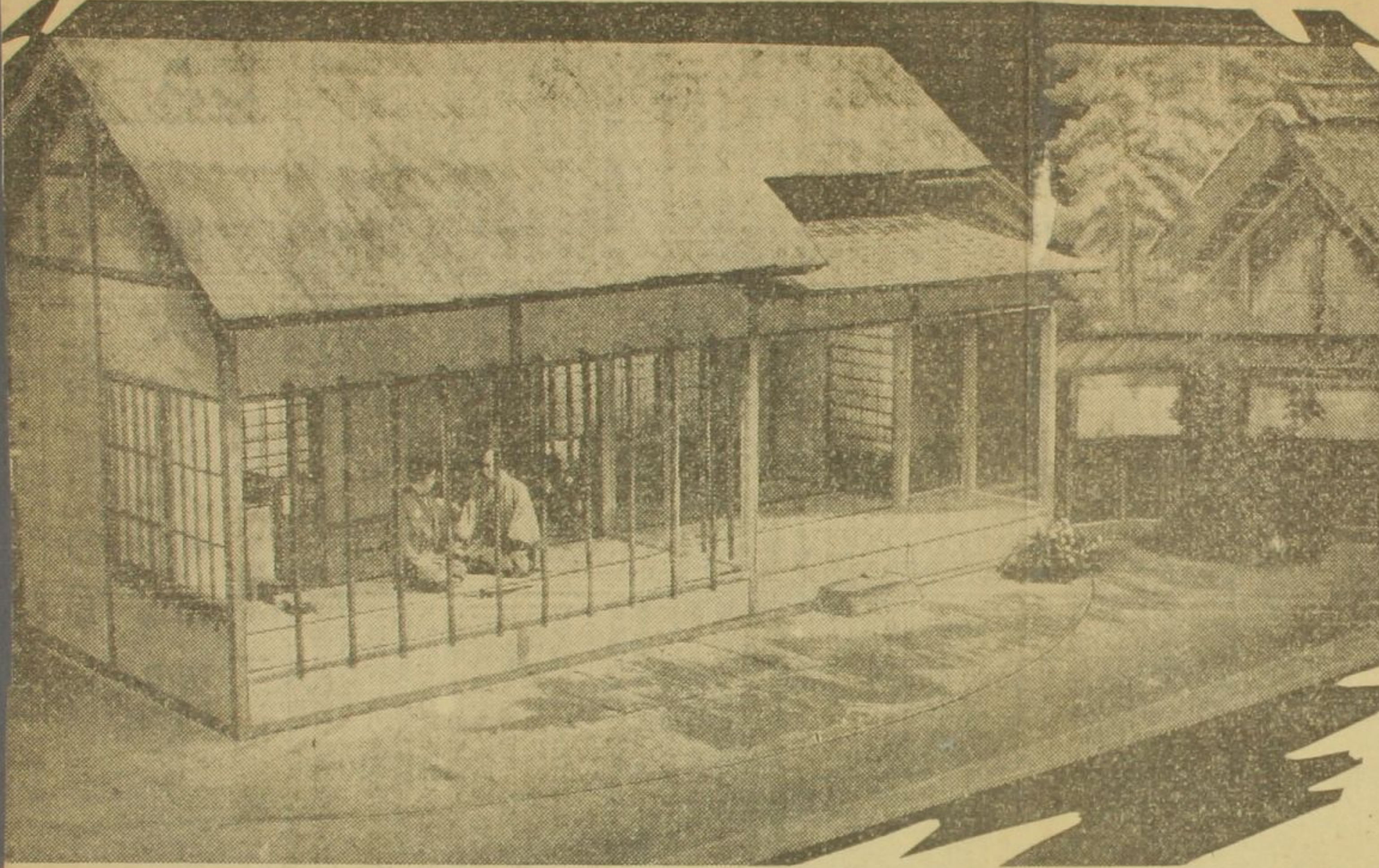
この六月の末頃でした。私の知人で頼山陽の遺影に感動してゐる小田氏から話があつて、今年山陽の百年祭が行はれるから、山陽の遺影を上演してはどうかと勧められました。



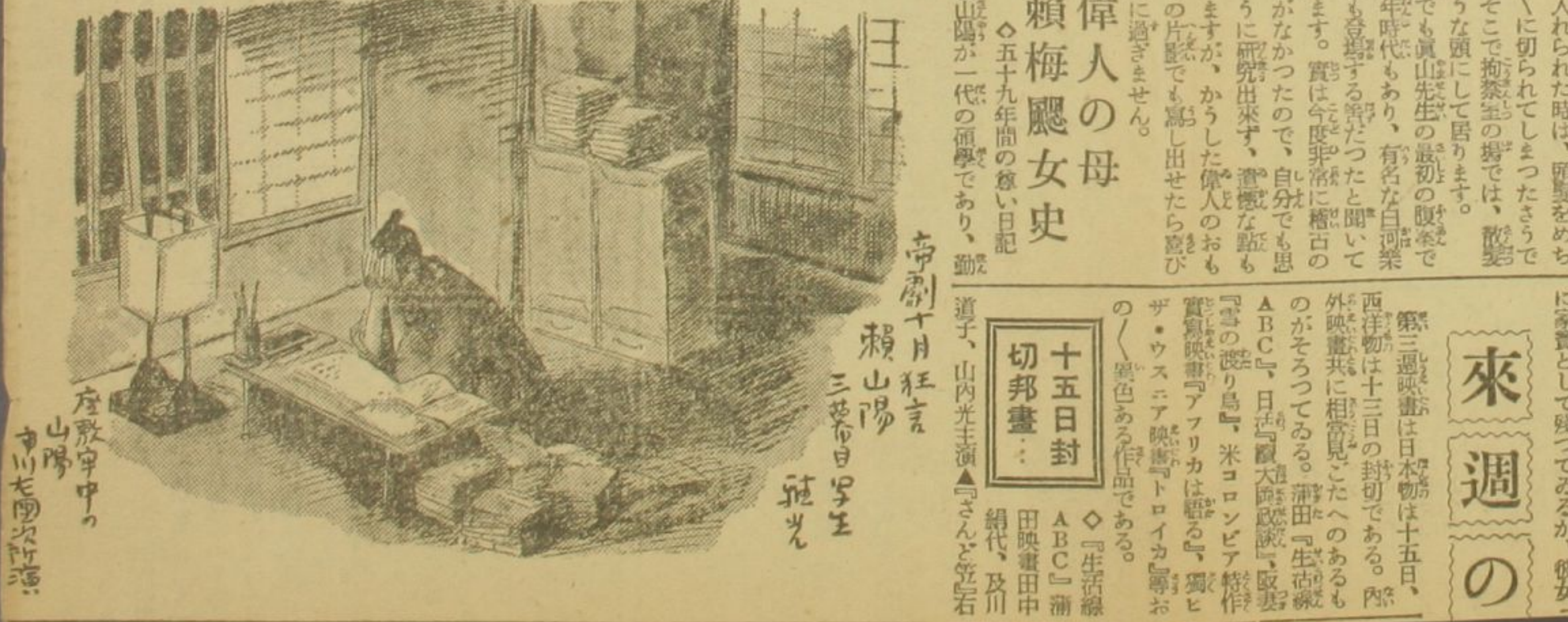
市川左團次談 王家で偉大な文女である事は、今更いふまでもないが、彼の天才を育むに最も力があつたのは、實母梅屋である。



頼山陽の遺影に感動してゐる小田氏から話があつて、今年山陽の百年祭が行はれるから、山陽の遺影を上演してはどうかと勧められました。



眞實明——頼山陽の中の一画面と次美麗



頼山陽の遺影に感動してゐる小田氏から話があつて、今年山陽の百年祭が行はれるから、山陽の遺影を上演してはどうかと勧められました。

頼山陽の遺影に感動してゐる小田氏から話があつて、今年山陽の百年祭が行はれるから、山陽の遺影を上演してはどうかと勧められました。

立教が明大を凌ぐ... 苦境に陥り三浦に死球を與へて腐り百戦に快打されて破滅した。

立教巧守に勝ち 明大焦燥に敗る

戦評 天知 俊一

立教が明大を凌ぐ... 苦境に陥り三浦に死球を與へて腐り百戦に快打されて破滅した。

ラグビー

中大OLC対法政OBラグビー戦は十一日午前十二時から高麗寺法政球場で舉行、廿四対十二で中大が勝つ。

Table with 3 columns: 選手名, 打数, 得点. Lists players and their statistics.

Table with 3 columns: 選手名, 打数, 得点. Lists players and their statistics.

山形支局電話十一日行はれた第十八回至日本陸上競技選手権会第...

4A-2 カ軍見事優勝 二年の雪辱成る

ワールド・シリーズ決勝戦

スポーツマンズ・パーク球場(セントルイス)十日發聯合本年度世界野球選手権決勝戦は本日引續き...

を放つて出でワトキンスも二塁後方に安打フリッシュの三割に走者三塁を占めマーチン打者の時...

入場料二百餘萬圓 セントルイス十日發連日七日間にわたつて行はれた世界野球選手権の観衆は...

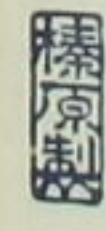
Table with 4 columns: 選手名, 打数, 得点, 失策. Lists players and their statistics.

便宜上今回の山陽劇を中心として環境の人達にも及び度存候

- 川崎 卓吉殿 和田 英松殿 大谷 竹次郎殿 小田 久太郎殿 坂東 壽三郎殿...

旅行不在中 社長の片紙 全招えん 子行く旅ハ 女の命の ありと曼 けれ顔福ん 花さる

○有橋義彦旧花の云書を引くは中二松平
乗全の書に井伊直成の和歌と落しは小幡かある
此の乗全は何人かあるか人名字あるの同名があるけん
も時代をわけるので、更なる元調へも早大図を後
に依頼して四五いれたが、その漸やくをわける。此人の子
爵松平乗承の先代は寛政六年に生人の次三年
に歿してある。三好西尾の成まは和泉寺乗寛の
まゝある。お南の経歴も人びら弘化二年、文中と
する寛政五年に再び文中とありある。文久二
年又退隱し、後方と稱した。此人の歌集が自
筆のまま、複製せられたのが昭和二年に六月廿
百首と云ふ、乗全の傳は是の書に書かれてあり。



で漸やくわることを得た

十月十一日記

○矢野文相が訪ねて来た十七八年前、圖書刊行会
編輯所、記録類の校訂に其の一人がある。毎朝
曾つて遇つたこと、毎つたが、活次懐中(とある)の
書面をよび出して、云ふ、い、い、性年、貴下も預つ
て、鑑定を二人の手に流すれ、ま、と云ふ、困出したよ
も、る、こと、よ、切、り、き、い、れ、平田、馬、嵐、の、書、の、あ、ら、う、家、ね、の
こと、は、関、心、の、所、に、い、い、四月、上、旬、終、了、(送、日、時、方、考、)と
ある。約五尺計りの長さで、末に天保六、七年三月廿九
日とあり、平馬嵐謹啓(花押)とある。自分、い、念
切、り、よ、を、鑑、定、を、し、よ、ら、い、え、ん、此、人、に、托、し、て、置、い、れ、
ことを全く失念してあり、矢野の語るは橋の故

熱田宮司南田忠行、伊勢大神宮少宮司木野重
勝隆のあへて、幸せし共、平田先生の真蹟にお
おるゝとの報告に接し、誠々思ひのほかぬこと
である。

○早稲田大子に余の積年の功を多しと、墨表さん高田徳
長退職の時に老方千円の金を維持員会の決議で
贈るべし、今高田の存内と共に維持員辞任のつき維
持員会の左の決議を男と感謝をうしとありて今
朝田中徳夫特に来訪にて交さん

昭和六年十月八日定時維持員会決議

多年学園ノ柱石トシテ多大ノ御貢献ニ對シ維
持員会ハ満場一致ノ決議ヲ以テ維持員ノ御

感謝

退任ノ際ニ謹テ感謝ノ誠意ヲ表明シ併セラズ
ク学園ノ為メニ御貢獻アラシエトテ切望致ス

昭和六年十月八日

早稲田大子徳長 田中徳積

市島通夫殿

○此より十一月一日、放送局の「後」を放送
するに、このころ、同日、一週、同者、海、八
全園の同者、おもしろい、後、肉、河、名、後、
と、宣傳、を、し、て、みる、の、で、自、分、ハ、代、表、的、に、放、送、を
する、こ、と、は、な、る、の、で、お、も、ろ、い、が、一、以、年、七、回、一、こ、と、を
や、つ、た、ら、な、い、後、の、愉、快、を、い、ろ、く、と、な、す、こ、と

あらいしとえ比へと思つてあゝ、まゝに就て思ひ出さず
材料をボウく書まつけて見つて、本居宣長の判
首の和歌に漢文の状を詠じてあり

一 せはつちと一日一夜もあみ見れば、今年も
漢もぬ心地こそすん

一 出みこくさくまの世の中、あみよま
ばうらしの一きりさ

一 あみよめ心の内、時わづら、花もさきさ
月もさきさ

一 あみよめが倦えて寐しきるを、さき人七
訪ひこが酒七のまね

一 暑がけのあみよめ、忘れんて夏も扇
はたらむとせせ

一 漢もぬれも倦らるゝ、諸々のあみとあつ
めをおくも此の一のみ

一 せうしにねたひとまのあつ入のいとま
るゝとせ、あみよまのうら

おとせ、此等の歌、詠まんてあつが、漢文の楽みも
このあみよめ。和の中しに、負賤を歎する、莫ん書

中、富貴あつ、九人二河の陋屋、垢を悲しむを休め
ん、書中大厦、高揚あつ。妻さくゝと、孤獨を憐れ

んとあつ、美ん書中、賢あつ。妻あか醜婦、たと
ふてあつ、げく、書中、美人あつ、酒が、あつけん、

書中、酒あつ、うまの、教を欲す、この七考、

書中、酒あつ、うまの、教を欲す、この七考、



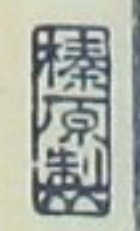
すけいぶ、旅中一心一冊の書に氣が集中するからである
まじう。豈然の中まゝの何れが喜ばしいかと云ふと書物の差入
のあつた時で目立ちます。此處をいふ書物を精読する概
分りあつたせん、氣が合つた者物さう、一行と果てあつたハ
讀みまゝ見、随分及後にも保連し、復も讀むこととある
ます。深處人定まつて後の讀出し身入、必去りよむ感に深
い。いふも、割割の人が偶々閑を得て、書も読む、
愉快さういふ、斯やうな讀書の境地さう、氣分におも
かあつます、その日、氣味も氣分も閑係があつます、けい
割割の世の中、い、讀書の境地を、選ぶこと、い、考へよむ
あつます。と、そのうち、南の境地、い、無んが讀書をせよ
と、いふ、讀書の時間、切角の時間が、無駄に費せよ、此

標

上りの不規則とさうです。人間、毎のく、如、い、無駄、時間
の、あ、い、居、つ、か、い、せ、う、か、人、と、語、を、交、へ、つ、て、さ、う、い、自
ら、何、す、を、考、へ、つ、て、さ、う、い、教、を、坐、睡、す、る、か、さ、う、い、唯、れ、不、
人、や、り、一、時、二、時、間、を、あ、い、な、す、こ、と、か、欲、さ、う、い、の、い、あ、
ます。郊外から電車に乗、朝夕都市に往來する人々を、大
概、往復、二、時、間、を、費、し、ます、の、こ、ん、を、空、しく、い、ん、や、い、
こ、こ、さ、う、い、ら、即、ち、い、ん、を、讀、む、に、用、へ、ら、い、ん、さ、い、
の、あ、つ、た、さ、う、い、か、一、時、間、の、六、十、分、の、毎、日、二、時、間、い、せ、う、こ、
十、時、間、を、費、し、ます、一、月、を、さ、う、い、す、一、日、を、費、せ、
い、ん、大、部、り、を、物、の、七、講、文、集、り、い、果、せ、う、い、ん、を、
無、駄、に、し、て、唯、れ、欠、伸、を、か、へ、て、考、へ、す、の、い、隨、分、馬、鹿、け、
い、れ、こ、と、い、い、あ、つ、た、さ、う、い、か、さ、い、中、の、境、地、を、さ、う、い、ん、が、讀書

昔一の書傳
ハ寺ニハ居ル
テ常ニ巡錫
シテ吾カ法を
説ク所ニ示辯
セテ道徳ヲ
示シテ則チ
道徳也ト云
フニヤウレ

をせよと云ふこと、
留新日本人の書物を讀まざる書物ニキチント坐し、
をてかたを無人に書物を讀まざる癖ありき。こ
漢子時代、
と机の上で讀まざるハ、
すか、
今日、
自印車、
くも書物を讀む所ハ、
りまさん、
の



併し、
あまさん、
か有り、
讀む、
七、
夜、
分、
か、
若し、
ま、
書物、
の、
め、
之、
之、
斯、

校の日記があらはとあるが、見るとおもむき。此人が、校を去る時の日記に詩歌を書かせる。あつたもの、詞をなすを思ふ。又、航海中の生活を送つたこと、あらわし出して、余と比ぶる中、於木元美の歌と余の詩がある。とある。その詩、引かるとある。

別れの涙を袖に濡すも、又逢ふことを待つる

（集一七）

三重の長女

雲錦生元美

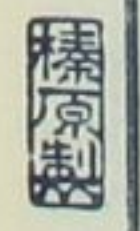
一西遊歌、涙自流、ち、却從是、共誰故、
橋夜月、分懸、空、花氣、昔、影、春、水、以、
の次十一首、為、河、原、君、書、

標

北涯狂生以留志満

君の日記に於て、於木元美の歌、以留志満とある。一、早稲田の市、時、留志満の事、む、日記に在り、ある。知れず、此、留志満の日記、に、留志満とある。と、ある。自今、姓を以留志満と改むることある。から、自今、の昔、いれ、る。お、わ、ある。ま、い、か、此、留志満と記、し、る。又、何、れ、て、ある。河、原、流、流、といふ、あ、の、娘、い、士、官、の、遊、を、つ、る、い、か、剣、を、抜、い、て、体、操、体、を、疾、駆、し、つ、る。い、か、一、く、思、ひ、い、か、こ、の、人、の、こ、と、を、思、ふ、と、忘、れ、て、ある。の、時、に、留、志、満、を、行、つ、る、擇、喜、を、と、唱、へ、る。二、三、の、耳、葉、研、忙、殺、碎、後、秋、の、二、書、を、か、く、あ、ら、う、と、ある。面、倒、七、さ、の、い、か、永、く、流、つ、と、ある。南、武、の、う、ら、う、今、の、擇、喜、

前出故男音の生涯に建る銅像の志書
とていんを難きを免へたる。即ち此原の書は
り度とふ類と考へやうと頼まんとすも辭し
書かたりしゆらり新築出来れん心とん亦頼
九枚ありし書も大額二枚送る一枚忠厚の即
一枚横雲の書も一書を送る一書を送る
あり刻書一巻：扁額を頼まん、鮮滌家跡と考
へて又印譜の帳：題字と請ふ、凡聖の帳
相能難安と題しやう、かかしの板友とて候本
二考と請ふ、先輩の日本刀の歌を書き時類
決替の書と宮創也也、秋春風の詩巻の首
題字を請ふ友人、幸唐詞と題しやう。



即ちの友人一合を似像し今を余り請ふ、
難人共在、田修を思ひ及んども未だ佳
を免へず、新得の友人余り扁額をもとめ
柳清書格と神臺として應對後、柳清書
影とせしうしと梅あり、日本の名山あり
錦一巻の首、題字を請ふ友人あり、書
勝其好詩畫競好と題しやう。即ち此切
の詩を撰め難く、著し頼氏也、
日師友とて三浦鳩村の詩を好む、
此人余の時の師匠なり、保祿東也とて家
苑、此人の詩書とて、左に其の詩を
裾後香風拂路塵、お克山を入芳辰

論文云好春時友把酒須飲舊日詩
畫船從聲添柳類珠樓燈影映花
新衣懷不惜款相飲曲盡青衫愛
春春

春遊詞十首之一 鳩村端

家為鳩村の印若干あり芙蓉刻印二顆
一、滄浪の印鳩九畹、曾て宗春より好ん
だるよの印鳩村の舊為に屬す、宗春は乃ち
鳩村の偏男也

○の次六年巴里萬國博覧會に我國の珍寶を
載せし解纜す佛國郵船二、三隻、伊豆回
り良港附近に叶碇沈没し、其に採海術

海防

七印稱すも船とせし文は、予孫寶の田ぬの印
をいしとせんなるは、休久阿良一、まの天草の海人
夫を備ふて其の田ぬを北真國に送るが由務有
るといふ、頗る摩訶羅しとる程なり、と、海人夫の成
切の世を教るか、とることも重なり、と、所るるが
の法の不載、寶物中、とる名古を賦類の黄金
競るをいふ、と、のふ、と、他、い、と、得、と、
今、ま、く、所、の、概、ん、ハ、移、す、頼、壽、家、の、純、金、の、茶
釜、佐、州、海、防、神、祀、の、寶、物、行、一、尺、の、名、品、珠、玉
と、い、ふ、と、い、ふ、と、い、ふ、向、は、船、去、の、類、甚、骨、指、物
時、針、と、い、ふ、と、船、去、の、類、甚、骨、指、物
骨、の、短、錢、海、防、の、名、品、然、る、船、長、が、名、品

を重しその自殺しえり因り初めを切らうと云ふ未
る十月六日依久阿久一の胸像除幕に一物の漢
説を讀みぬと其の任麻元袖の比をも書を
せんハこゝろきつ

十月廿四日

○家信、家治、家齊、三將軍の消息を得れば
或る賀節に小袖を贈るを謝し給禮状を
用紙の大方殿候、将軍御名の代り、各形の手
紙を刻し給大印を捺し、礼の言ひ折りの執事
の代りの言ひありあふことき、横柄の言ひあり、法
の極めを河津もくもく文書の終りに某をきくと
毒切を云いしらと云ふが、お定まりの形式である。
二十七日古文書の一標本であるから、保目



の觸れりをも候と、極めを築中じ、四道と云ふ。

因に家信、家治の子なり、家治の家重のよも、家齊
の父也

○秋山陽小品文の如余常以服す、書意を以て毎に
其の誤謬を以て漢文を喜び、往々字句自可事こと
り、左の如きも即ち余の喜んば、軒りて看過し得
たるものなり

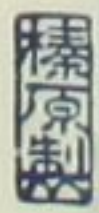
宇治川舟遊之記 (平曲)

横書

大倉房山

奥書

文政丁亥夏五月、送母于有馬、遂并過伊丹、
宿長古堂、醉臥演平洛、主人請余自書、
半成、就睡、翌晨宿醒未解、續而次之、
笑之氣滿腹、日暮、歎並出、是亦怪事、
吾亦避我鋒也、竹意



又堂主入京携來、清置印款、一笑為謝、自愧
狂態、然如其書、為野馬蛛絲狀、洵非淺
淺、謂之廢全、楷波裏王、獻之非誇、
余更為之、決不能如斯、乃知酒書之、非
裏書之。

池大雅里

京都松石堂存

款云

鴉尾主人、齋持大雅先生墨、作之軸、
嘗請余題詩、余詢曰、前賢之蹟、豈
可者、儂輩墨、洩之、佛類着者、自
造羅葉、于後主人造墨、縮圓、墨而便

余題語又皆余謂是佛影乎不妨着字
因心此詩今又考大書之一甚草草成
夫六金身亦出於佛力也歎重

○今日文行世に回者を過り岩崎灌園の灌書秘録
二冊を得たり。此人は文化頃の本草の大家で七世徳
ある大邦の若かりしを常正と云ふ、本書は刻するに
おもしろし原稿も、初稿と再稿と共に傳へる、
再稿より漢文の序あり、文化下丑孟夏書于
又玄堂岩崎常正と歎す。價目は江戸三組寺物
問屋行吉「改印」の黒印も二つ不に捺す、之れを以て
おもしろし、上木克とて寺物問屋行吉の手を以て



この書も持た、尚ほ此印の外に、内務省圖書記
の田形印、「寺田橋本館圖書」の印記あり、農
商務省圖書「の印記あり外、橋本館印」と捺
す、此者か一といひ、官省と云ふこと、此等諸印
記に據つて徴するを得べし、若者自身の岩崎
常正の印もあはれ、清印のあり、官省の
あり、そのあり、上下二冊を一巻に綴り、その
あり、おののあり、再稿の初稿を比するに、詞ひ
も、改定版あり、版下と見るべきものあり
あり、世未刊の此者が初稿を保存
せんあり、そのあり、價六十圓也
和六年十月廿一日

朝日 案内

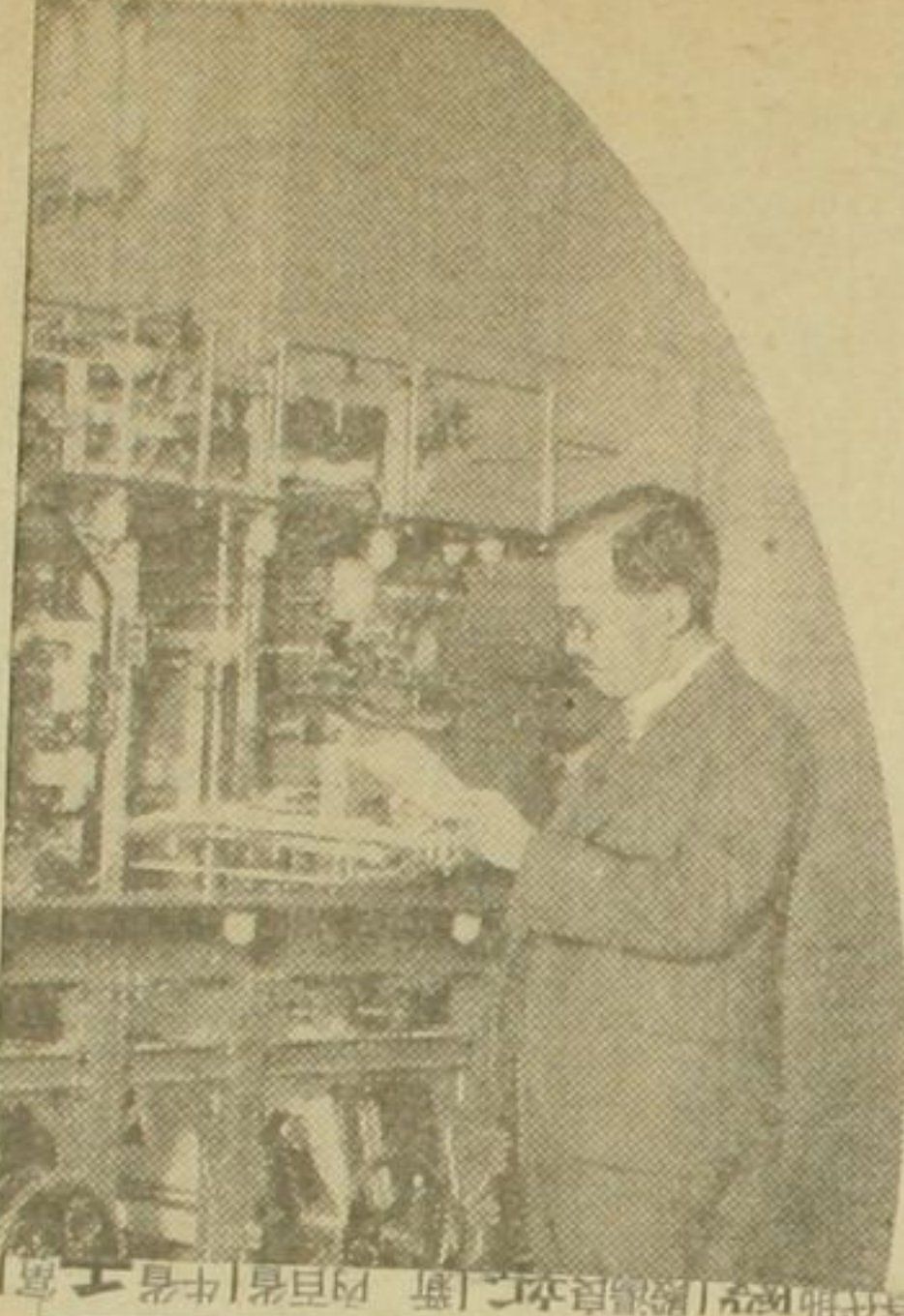
種別 一件一回 一回以上一回
 十五行 十六圓 十九圓 二十五圓
 五行 十圓 十四圓 二十圓
 三行 五圓 七圓 十圓

婦人 齒科 齒科 齒科 齒科 齒科
 牛込區若松町七六 山口事務所
 電話 九二〇 島田齒科醫院
 ミシン 掛三三 縫製 縫製 縫製
 (後草履 縫製 縫製 縫製)

讓醫 讓醫 讓醫 讓醫 讓醫
 讓力 フエ 近代 近代 近代 近代
 池袋 池袋 池袋 池袋 池袋
 タバコ 切手 切手 切手 切手

求問 求問 求問 求問 求問
 求問 求問 求問 求問 求問
 求問 求問 求問 求問 求問

資金 資金 資金 資金 資金
 資金 資金 資金 資金 資金
 資金 資金 資金 資金 資金



精巧な模型

(上) 電光
 場 (一) 右方
 部 (二) 輪轉

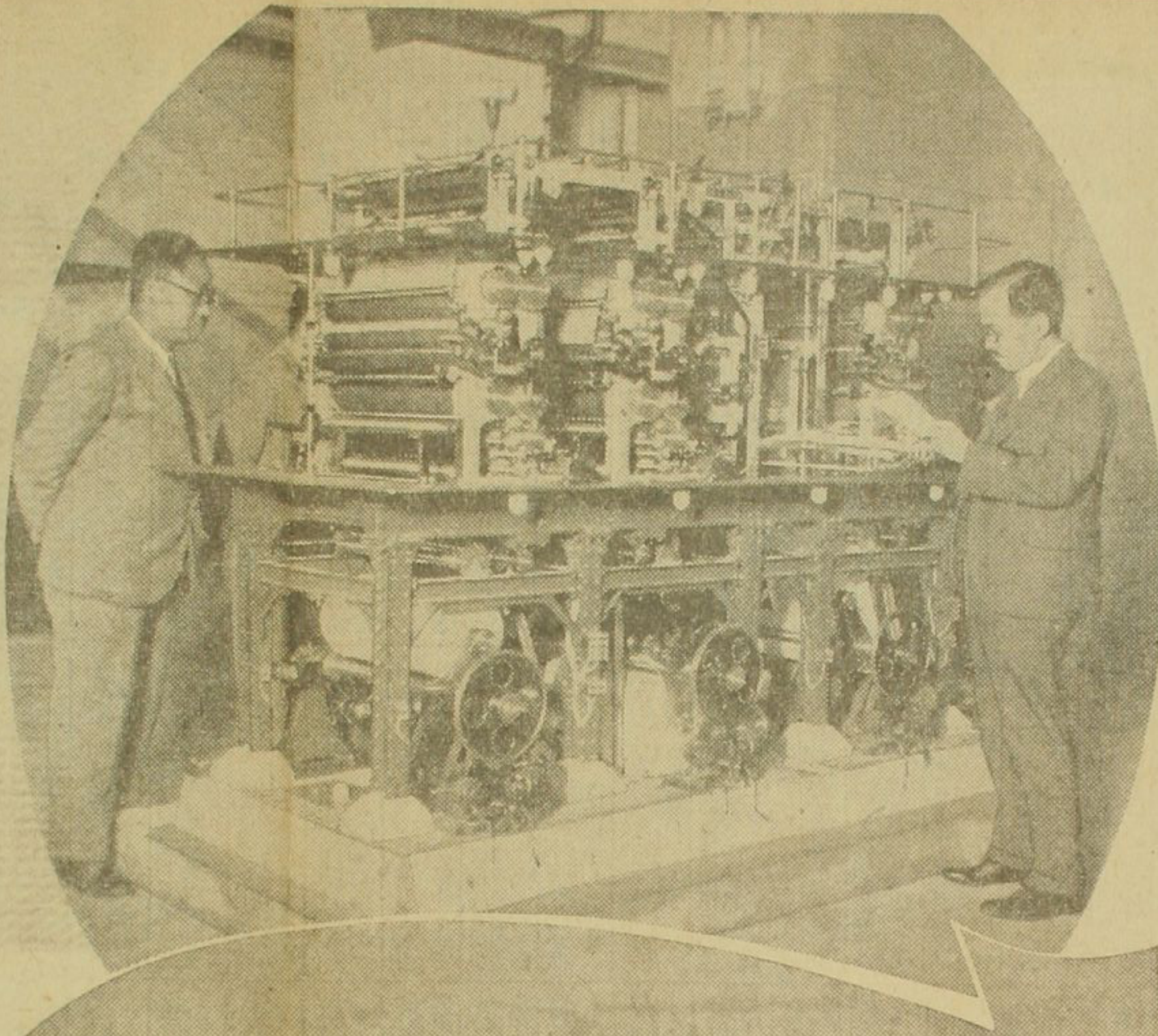
無通帳 無通帳 無通帳 無通帳 無通帳
 無通帳 無通帳 無通帳 無通帳 無通帳
 無通帳 無通帳 無通帳 無通帳 無通帳

社員 社員 社員 社員 社員
 社員 社員 社員 社員 社員
 社員 社員 社員 社員 社員

業 業 業 業 業
 業 業 業 業 業
 業 業 業 業 業

澁草祝録の序の内云々
 草木有天然之性、能随其性、則無不繁殖者
 矣、故為繁茂者、隨凡徑山河而復能生、酢漿
 草風仙花、其實觸之破裂而散生、浮萍隨
 寒暖而浮沈、為花突出而避波、蔓草無眼
 而左纏于竹籬、寄生賴于木液而保生、女蘿
 得雲霧而始生、菟絲子無根寄他氣而生、
 猪矢々無手而貼籬壁、是皆造化自然之理
 何假人切乎、
 況き得ての如き、草木草家、七始めて此文ありと
 云ふべき歟

櫻島製



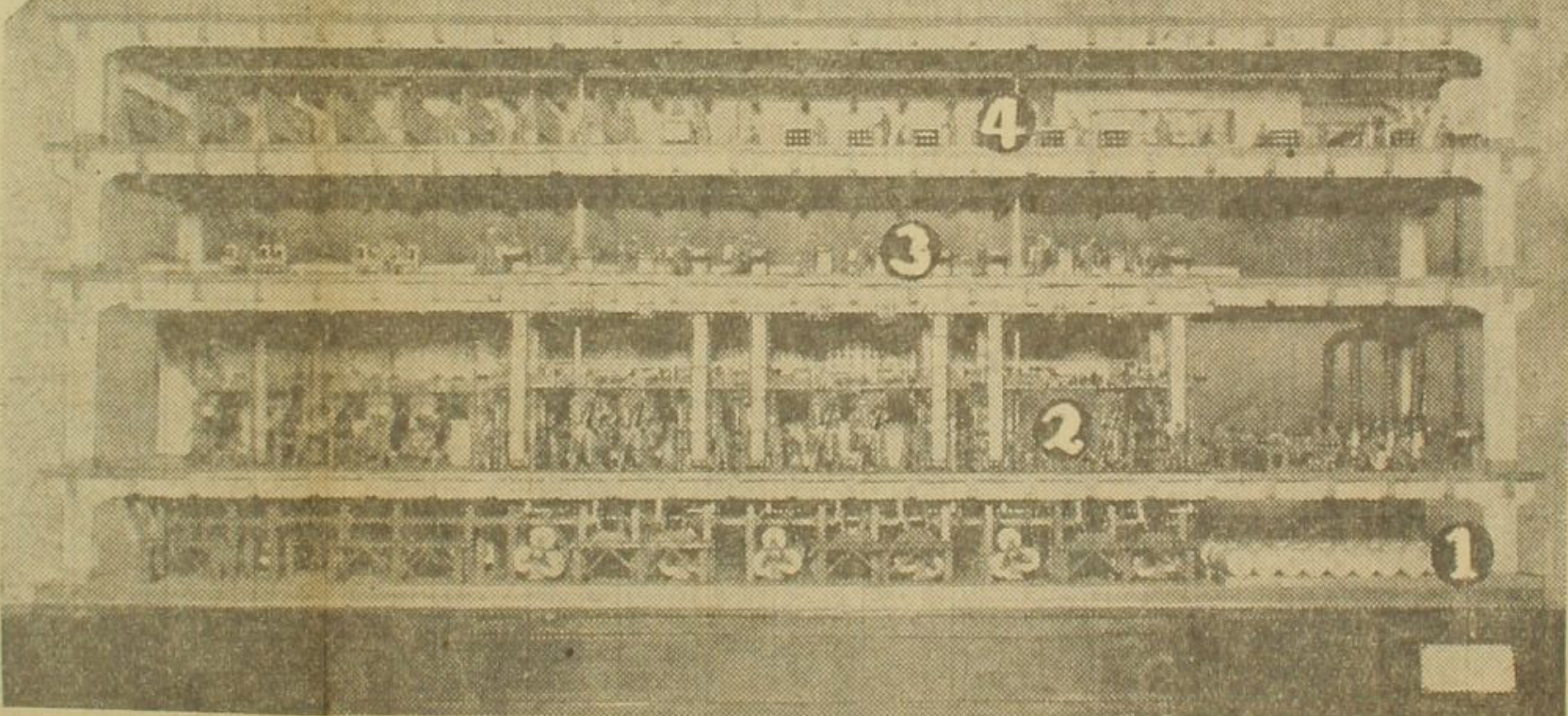
精巧な模型

〔上〕電光輪轉機〔下〕は印刷工場(1)右巻取紙左巻輪轉機の下部(2)輪轉機(3)發送部(4)活版部

ことごとく

容れる事に決定した

イタリア大使マヨリーニ氏はフアツ



科學博物館の異彩 本社より模型出品

印刷工場全景と電光輪轉機 近く天覽を仰ぐ

科學日本を二體物内に配設せしめてある上野公園の東京科學博物館は、十一月二日皇太后陛下の行啓を仰ぐ事となり、秋保館長以下我國科學の進歩に寄せらるる聖慮を感し、陳列の準備に苦心を重ね、それぞれ専門家によつて陳列品の厳選完成を期して居るが、現代科學の先驅者とも稱すべき印刷工業に關しては特に東京大阪朝日新聞社の機

豆輪轉機が動く

朝日式電光輪轉機の模型

世界にたゞ一つ

「朝日式電光輪轉機印刷機の四分の一の模型は、模型といふよりも動く豆輪轉機の實物で、長さ二〇センチ、幅一三〇センチ、高さ二七〇センチメートルの電光輪轉機は、恐らく世界唯一の豆輪轉機であらう、その構造は全く實物通り給紙、印刷、折疊、電動機、四部組立てである、四〇センチの可変いまま取紙が複雑精巧な印刷折疊機内に流れ込み、レ

きて各部の動作が見にくく、ワザく十分の一のスピードに放慢たもので、容積からいへば實に六十分の一に過ぎないこの豆輪轉機でも重さは二トン余もある、右の製作は本社印刷局江崎技術部監督下、本社工場と池田印刷所とで約三ヶ月を費して製作せるもの

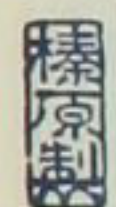
印刷局工場模型

人形三百五十

印刷局工場模型は四十分の一の作りで、社屋一階より三階までの切斷面を見せ文藝、植字、大組より紙幣、活字鑄造、更に電光輪轉機十五台連結の壯麗から、エスカレーターと自動車による超スピード發着を應へ得る可なり、模型化したもの、この模型に使用してある男女の人形だけでも三百五十、その服裝の如き現在使用せるものを如實に現してある

同本社は觀覽者の便宜のため「日本の印刷工業」なる小冊子を作り本社顧問杉村勉人君氏、内閣印刷局印刷部長矢野上學博士及び本社の江崎技術部長執事となる解説書を觀覽者に無料配布する事とした

何假人切乎、
況き得てのさう。事未草草家うし七始めて此文ありと
ふべき歎



○鶴屋の七代小姓と高くし来り趣運と云ふ
ものあり、さるるの介

仙傳術海ありは公、吾事一偷あり又子
中、技業出関飛我る、吾事梅梅自
まは

えの誠業と云

梅

外に山陽の館一丸、辛間一懐の若きも、巻置り、此の
辛儀のまじりの梅、一序、流入の中、からえ出り、
よしが、若ぬれ、あふ、待て、流く、急、考へ、う、運、か、ま、と
ある。ゆつて思ふ、い、日つむや、山陽道、果、の、陣、列、中、
ふ、小、我、に、昔、の、梅、と、然、け、し、此、の、を、又、は、こ、こ、か、あ
る、或、は、此、の、青、筒、と、流、く、は、あ、か、と、思、ふ

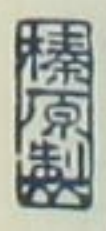


○早稲田の六代、回者、彼、花、本、の、皇、儀、の、禮、記、の、美、疏
と、大、新、本、玉、の、梅、か、を、回、者、に、指、定、を、さ、ん、だ、ん、え
ハ、南、北、回、者、に、お、あ、り、し、七、を、あ、る。此、の、指、定、へ
決、し、て、あ、る、と、し、運、動、が、ま、り、い、こ、と、を、し、此、の、お、あ、る、
回、者、の、神、查、を、あ、り、し、切、り、つ、て、あ、る、と、あ、り、先、以、回
者、に、あ、り、し、未、親、も、充、分、指、定、し、此、と、あ、り、へ、此、は、
指、定、を、し、し、し、し、の、此、の、全、体、此、は、あ、り、し、し、し、し、
指、し、て、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
と、あ、り、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
此、の、あ、り、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
回、中、充、分、指、定、を、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
大、回、者、の、指、定、を、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、

の同方館がある、同主の同方館は四王の附属
同方館に於ても同館に指定をえんばざる無し、えんを
偏ひし由中伯に感説するもあつて、えんを偏し
敷すると共に改めし自今かゝる感説の言を改し
也。

十月三十日記

○酒府津：古四の列在のありし時を往來せしけ
ん名地名其他の考証をいふる人々も無少心にあ
つた所、口史書も淡田濑指が四府津と記し
る又古四の列在不在地前川に記したる如
き考証を能く集古にぬめをぬめおるのみ、ここへ
の切り板をぬめおる



國府津の地名

國府津は最初小總コソウといつた「曾我物語」には、古字津とあ
る、小總の津が約してコウツとなつたので「實蹟記」京鎌倉
六十三次の譯名には郡水コウと書いてある。漢字にて國府津
と書き出したのはいつの頃であるか。この二里東に國衙の
あつた國分村があり、此濱が唐濱と呼び、鎌倉時代外船碇泊
の要津であつた所から、國府津といつたのであらうと推測す
る。

唐濱の變遷

前川に接した國府津の東端二三町の海岸を唐濱と呼ぶ、昔
は國府津山麓の彎曲した所で、船舶の風浪を避くるには、屈
竟の場所であつたので、其地名は宋船碇泊から起つたものに
違ひない。今までのあたり宋船碇泊の事實を語るものは、船脚
を沈める爲め搭載し來たと傳へられる磐石が所々に残つてゐ
る。それは國府津眞樂寺の歸名石、寶金剛寺の波字碑、其他
に田島村の玉泉寺にもある。

此海岸は古來幾度となく地震の災害をうけ、ことに海湖の
作用により大なる變化を來し、終には漁舟の碇泊すら自由な
らぬ荒磯となつたのである。慶長年間大久保長安により、始
めて東海道東海道の里程を踏査し、宿驛を設くることとなり、京江
戸間東海道五十三次は、三代將軍徳川家光の時に完成したが
其以前京鎌倉六十三次の頃は、天險の場所であつて、前川の
車阪と進退ともに東西二壘を控へて、戰略上要害の地であつ

たさうだが、東海官道の開くかに當つて丘陵も平夷に切開か
れ車阪も全く頂上を削られて、前川より僅かに上る位の程と
までなつたのである。

前川の鹽田

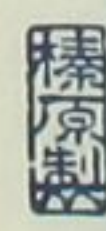
北條氏康が武力以外、甲斐の老雄信玄を威嚇したのは鹽であつた。其小田原の鹽は、此前川で産出したものであつた。故に武田氏はこの前川には涎を垂らし數回攻め入つたが、いつも唐澤の險で支へられ、遂に志を果さなかつた。この鹽田は早くから拓けてゐて、鎌倉時代には既に十分の發達をなしてゐたので、小田原北條の頃は、少なくとも百町歩足らずの鹽田があつたらしい。北條氏は此鹽田の燃料として、片浦半島の石橋、根附川、米嶺の山林百町歩を前川村に給與してゐた。こゝは相模灣の激浪を正面に受けるだけに、海嘯の厄に遭ふこと甚だしく土地を奪ひ去られ、徳川幕府の中期には鹽田僅かに六町歩、實鹽五十四石の少數となり、元祿寶永の海嘯につき、富士の大噴火と共に、殘存せる六町の鹽田は終に全滅するに至つたのである。寶永噴火の災害は、小田原藩地方七萬二千石の民百姓には、實に大正十二年の震災よりも、より以上の慘禍であつたさうで、元祿十四年の地震には、領民四千人を失つて、江戸明曆大火の同院と同様な小田原城下に谷津慈眼院の創設を見る位であつたから、引續く數回の災害は、殘存せる住民はその生命すら保全するに難きまでに至つたので、鹽田喪失の如きは、改て問題ではなかつたのであらう。

戰國時代この地の鹽は必須のものであつた事は、後世猶其國境に残る歳暮年始の鹽の贈物は、よく當時の事情を物語るのである。



○大震災以後の復興に就て何か改まるべきものか
 道路の概すよの無からう。道路の真に欧米の都
 会に如く名の通り改善せん。東京の道路を
 東京入府以来評判の悪道は、芝浦見物車
 道の多る泥濘の深いことが奇なり、江戸市中の
 行きの持たぬ足駄か又安しとせん。と傳へて
 ある。今次以後何をも西洋を模倣すもやうなる
 東京の道路久しく舊態を存し、部分的に
 久進築を以て、一而を行はざるが、根柢から山
 土、電の道(道の石)の石も、凹凸を生じて、
 視態を以て、式人をして、海大敷の戦場を
 見せしめ、或るやうに、或るやうに、或るやうに

見ると何んと言ふても文化の長く後進を拓くことを思ひます。
併し道路が如何なるにせよ、日本の道路は八とく立
派なうら比やうにもあるが、或は皮打の美かたの如き。羅
馬の盛時道路を信つた時より、厚さか三尺の如く五尺の
も及んぬといふが、今や西洋でもさるよりのものと云ふが
東京の如きところの土質の堅かた、紐育のやうな地を
以てするのと同一のやうなところを耐くさし
けら、殊に日本の石畳の多いことと云ふ一筋はさる如く
九寸をさくして見ても、さういふ光かといふに、いふ
ゆゑ、あつたての角着の面目を改めたこと、拓
けり。志のし、道が改められたる道に對する運
送の甚だ盛の。今の或は道路を拓くことを何んも



思ひます。よが甚だ多い。紙屑を投げ舞うるやうな物
や、塵をいくよの、時より散らさるゝものがある。うら
く道路の掃除も、お高のありか、こつと見る。
帯いたまも、見ると多い、大衆が動いたりするゆゑ、
をえる。折々の代名や、街の街、街の街、街の街、
のか帯の、足の道、道の道、道の道、道の道、
に起るもの、市の市、市の市、市の市、市の市、
衆衛生を考へる。新築の氣を、案の案、案の案、
と云ふ、都市の道路を、案の案、案の案、案の案、
とも、衆の衆、衆の衆、衆の衆、衆の衆、衆の衆、
感と、案の案、案の案、案の案、案の案、案の案、
他人の、案の案、案の案、案の案、案の案、案の案、
他人の、案の案、案の案、案の案、案の案、案の案、

徳もまじの起らざるの如く道政に勤しむる尚更今の官
大いの人を乱暴せざるの如く無理の如くせざるの如く
氏(氏)の面目を保つたるを著する如く注意を
要する事あり

十月廿三日

ことし一未の年と云ふの如く羊の擬し紙屑
紙がホストのやうに上座に居る。○あれは、ち
の役もしてゐる。紙屑(紙屑)も同じやうな如く未
の紙をやらふかるところの如く其意を寓し紙屑
あるか、と云ふ如くあるか、と云ふて、とんぱけ
の函に紙屑を投する事があるか、と云ふ實際の
事、(紙屑)もあつたか、今の如く、清濁宜侍の
廣く、(紙屑)もあつたか、と云ふ。



○自分のラジオ致(致)後書(後書)の内、前に述べた
う、(紙屑)の一二を追加するに、(紙屑)の境地、
紙内の漢文をかく。紙中の書物(書物)の境地、
ことをまゝ、お前の漢文(漢文)も、(紙屑)平生(平生)
得ることをも解し得る。思想上の犯人(犯人)も、未決(未決)
年の致(致)かゝるが、(紙屑)導(導)の(紙屑)も、(紙屑)も、
と、(紙屑)も、(紙屑)も、(紙屑)も、(紙屑)も、
か、(紙屑)も、(紙屑)も、(紙屑)も、(紙屑)も、
日、(紙屑)も、(紙屑)も、(紙屑)も、(紙屑)も、
役等(役等)自(自)かゝるを、(紙屑)も、(紙屑)も、
亦(亦)骨(骨)働(働)者(者)日(日)漢(漢)文(文)を、(紙屑)も、
二十(二十)日(日)乃(乃)び(び)三十(三十)日(日)七(七)業(業)を、(紙屑)も、

一、あるといふ共の得る所の争議に依る得る芳銀
 の増加と或倍も大きいといふがある。目の一説を附加
 する。家の内、返つていふは返すて置換を止め、て車
 中の船中、七本を返す所が乃ち有るてあると心得よ
 と云ふ所、移動回者館を廻き来り、回者館ひす
 ら自から、ジレく巡回し、歩らく、移動書、亦亦あ
 るべき等と附け加ふる。回者館を共同書、亦と云ふ
 こと、既る人もあるてあるていふが、公府を有れん
 といふ共、有る、就て後めと勧め、回者館の教益
 を就てい、カー、キギ、を挙げ、ある、世の、大、中、家
 とする、は、が、其の本、ハ、村、落、の、七、回、者、館、を、終、了、し、て、の
 に、ある、さ、え、感、に、漸、思、的、な、回、者、館、を、建、つ、こ



ともいふを、揚、ま、を、の、も、あ、り、日、回、者、館、を、建、つ、こ
 う、の、建、設、が、あ、る、と、さ、る、一、例、を、添、く、る。

余が、是、等、の、放、談、の、今、回、が、三、は、目、か、多、く、ハ、慣、れ、し
 ぎ、に、今、今、が、ハ、三、十、分、の、家、に、十、九、分、は、終、つ、た、系、行
 を、ゆ、り、を、見、て、あ、い、ん、び、の、時、刻、を、あ、あ、り、見、ぬ
 が、つ、り、さ、う、な、る、時、刻、を、脚、入、お、き、系、行、を、就、漢
 し、て、時、刻、を、見、ると、二、十、分、の、外、に、さ、う、い、ふ、の、ハ、少
 し、は、かり、追、加、を、し、て、下、に、三、十、分、の、範、圍、に
 全、部、を、漢、し、つ、て

十一月一日

〇村山(輩)の個人旅行、ハ、余、の、旅、文、が、収、め、た、こ
 一、ハ、就、ん、だ、ま、あ、り、と、い、ふ、間、一、ハ、以、て、其、の、著、者、の、北、條、詩、詠
 集、の、文、中、の、一、部、と、あ、る、左、の、如、し

○中川柳外が滋保帖と題第一に書畫帖を得れば没
 瑣言の爲の友人等が押巻しつゝもてたて敷き
 向未比何人の筆より難きとの言も差ありけり
 八左の如し皆一時の即興とて孰も其の程の故
 あり

長安	天迹	未隆	春夢	秋聲	暖雪
岸東	和守	風雲	水落	桂月	條二
龍月	滿風	柳舟	龍舟	草窗	松海
信經	他書	冷雪			

依田夢海が撰の秘の回と画しつゝ何れいふ人か
 和と人に囁いたる自書七折り江尾永彦の自書



自書野の意を有る狂歌、おもしろに判娘の思ふ世に
 におよぢあてゝ嫁の世話せよとあるも折る筆
 此冷らむを結ぶ柳の折るおもしろい哉あり。自
 己の等の人と自ら相違を頼む事ありとも
 出来合を婚ひ、空平ら別夜あり。あつたの故白
 ことを遠くあつた人々書かせるも一息一歎

此帖のあつた書流流舟が自心の長歌を考ひた
 折帖一冊を婚ひた此人の和歌帖の珍らしき
 思ふ

○今ふ千夜を故依田問答一の胸像除き帯と行ふ
 日は自合七式坊が一坊の演説を頼まぬの如し
 依田問と自心あつたの交りあり、吾即別界の先

是の人格の稱賛に價する人があるから自分も斯人の為
めを以て何かをせよといふと演説を讀む。印刷業
の創始は早く榮華未だあるが、具體的の印刷
業は依久間を祖として七十年ある。依久間が今の
秀英舎を創設した。の次九年、^〇七ある。乃ち
今を距る五十数年前の事に属する。彼は早く
活字を鑄造し、四版印刷を始め又字を以て活字の
製版を試みた。と一七十年等の敬服に臨むといふ人、
早く徳才制版を設け、優良技工の養成に努
め、労働者の保護制版を設け、印刷同業協
会をも組織した。此等活版の制版は今日こそ缺



き難い施設として業界が其の然ることとしておつたあ
の早い頃、於て目々の必要を感じて手に着けたこ
と、^〇眼の病いと云ふ病が流行し、只此目前の利の爲
を、^〇眼の病いと云ふ病が流行し、只此目前の利の爲
を尊重し、自分の社名があつた、^〇常々は徒々業
を止んと同じしウエは、^〇置いた、^〇んち女の演説の人
て無んか出来たことである。依久間社長の提業
員に、^〇あつた、^〇温情の隠れもあること、^〇病者の自家
の別を、^〇やつて保美してせよといふことである。
此人の業績は、^〇決して印刷業に止まらぬ。紙の
輸入防止の爲めに、^〇校紙を抄いて、^〇成りし。人
口の逐年増加する、^〇廠を、^〇回力を以て、^〇表つて

英豪と海外移民を合せていよいよ成印した。紀前天
草の島民を北海道に移して之の産業を教く比
こともある。或は信用組合を起し小工業家の為め
に資本の金融を回つた。工業協会の起して工業
條例を設ける所があつた。其他公親を起して比
市議の清くしつらうする。

あの人のよき実業家もあつた。よき実業家の
必らずしも行商人ばかりではない。あの人のよき創始
時代の困難期に案をたれしことを徹底向に成し遂
げて後世の範を示してある。今日の志きうに社会
本仕を呼ぶにけしきもある。甘んじエスとか国奉仕
と云ふの少くとも自利を離れて犠牲的の

謙

謙意がきけんさうさぬ。今日の社会をなす仕事は
その内其の内に其の為めを、然らざるに其の人の世を
の為めとするものがある。立派だが世を欺くもの
多い。古くは社会奉仕をした人の、信長河のやうな
人もあつた。あの人の何を日論のわが私腹を肥す
こときけんさうさぬ。その人のよき人の人
格は信頼し、時の政府が日論のわが私腹を肥す
ものを、おぬ勤むるとその足を踏まやうなこともや
らせた。やらしてゐることを着り成印するから。あの人の
信用の益を増し口にする。大いに減す。ある
と外にまゝのよきもある。あの人のよき。身体の弱く
かよく七百難を回して萬世にそのと、自分から

二女の書状と二男の書状の威風凛々たる書状

○紙の致味家が、
此の三紙の標上、紙の度
記号も漸く、
の標本を、
いふ各時代の文書、
として用途も、
り文書家の人の
無し、左の十一
紙の致味家が、
此の三紙の標上、
記号も漸く、
の標本を、
いふ各時代の文書、
として用途も、
り文書家の人の
無し、左の十一

藤原

① 元興寺書付

大乘流轉諸有經 天平時代

② 貞觀十三年
阿倍信小水磨宮大船最 奈良時代

③ 中尊寺經
田依金泥法華經第一

④ 大同二年六月二日

太政官牒

⑤ 元慶三年五月廿七日

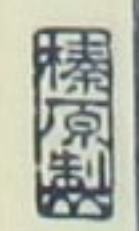
大田郷田券

⑥ 延喜五年十月六日

田代工券

⑦ 承平二年九月

丹波国日返牒 一幅



⑧ 天正二年根来寺障中

織田信長八将列署文書

⑨ 共六

近衛应山公書卷 五色の紙

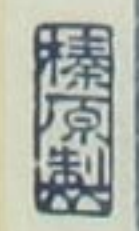
⑩ 應永年中古文書 一卷

⑪ 起証文 一卷

余の出陣日記の在りし

十一月七日記

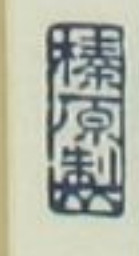
ことを任務とするよか抱りそ考もこの貸銀のふり多く
の特別報酬を受けしゑる。随分危険な仕事である
から、その行動も先んじて物なり秘密を保つてゐる。
大体一組四人で二人は親之の秘密を團體に授けし内面を
役員二人の外に左つて通信報告を司る仕組が
多いやうである。家族を多くする親之を以て普の
の若銀はけい送らるゝのめく、スパイとするよか多
いと云ふが、大会社の立場はスパイの考めは貴す金
ハ多し親の巨額であるが、多し金の内なる事議の
欲袖を穿ぬしなりする金もある譯は、一旦事議
があるよか所へ或十百萬も上るから、未ださ防く
考め、相場の金を投するのも計算上会社と云ふ



べきよか多しその通りレミス。スパイを採用するよか多し
工場のよか多し選ぶ所もあるよか多し、換子レが、之ん
を供給するスパイ会社が秘密ありあつて、よか多し
スパイも若く成する。此の会社が海義なきハ銀行
してゐると云ふ。スパイはるハ核切こ甲あよか多し
けんがうよか多し、いくハ核切こ甲ん少ハ核切ここと
よか多し、けい、四一よか多し、教へんから、種々の仕事
の株割もしるけい、よか多し、美等なきハまひ司の
スパイ会社があつて法工場の需めるを以ておこと
いよ。どうせスパイするよか多し、やるといふが、ソウヤ核切
るよか多し、おまきいから、その行動も必し多し
会社の利とする計りかゝる。随分めくハ一ハ後果

又畢ることあるといふか左もあつて心きこむ。偶々中央公
論昭和六年十月秋季特輯野荒畑実村の芳
偏スパー令記と云ふ一冊を讀みその概略を記
す、あゝいひ口辨に就て見ると
(十一月七日記)

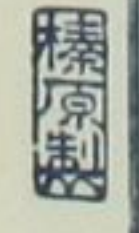
○洲之乗し松指の書は三浦純也を後んじ乾
也も乾山の陶業を把握したのれけんも焼き方の異
つるゝふれし乾山の名を傳へしめさしよめあつた
自公、此人の作が大ぬである。乾山の経歴に就てハ一と
り親ううひひふいかに村松のといはれいろいろ知ると
いふことを初めを記つた。彼人の一生の概よふ小説といはれ
である。彼の父は三浦清七といふ甘之居附の笛吹
にありし。三浦ハ本姓だが是れをむかひ住田といふ。此の苗



吹か子澤山に別居するが主が後の乾也の豆太郎
を卯の吹仰母の居る道り倉井田古六に預けし。此
の古六は實りき骨董高があつたが傑出した陶工
であつた。彼人の異日、位かを玩具のこときふ品を
いろいろ作つて、美を淡々あつて受つて活弁の助
けとした。あゝ話あるやうに家齊将甲に召こえ
て御前いろいろのものを焼き試みの完業を得た。
志あり此人の女がすまむに別邸あるあ茶屋の女を付
あて逐電し去ゆく出さけ、龜山焼を再興し
とし此が資金かゝりしてその中四叶はす、流浪して伊
勢に往き、井川村者が茶古焼の復興を企てつた
所に出立のして、あゝく其の業を助けしこと也

るが、その後どういにかおんわらう。

お白玄六遊電の後より幾とんはあふゝ食に困り豆
大りい、魏伯元の為する傲のそめる現をを乞う之れを以
つて辛おしを口を糊しつゝあつた。此の... 仕合の...
の記つに、ある日吉原の所若主 西村佑平、現中
の心の一とあつた。ことを知ると、あつた。此の作
平、~~風~~風流を以つて若あふ勢屋の... 人丸を主
である。此人抱一と名に、抱一を、漢をん乾
山の物、佛の秘書をも、あつた。此の少年の技の他
日大い、上達の、~~曉~~曉、乾山の技を翻かして、よふといふ
ふ考から、厚く世話を焼いてくると、やうな、~~愚~~愚
乾也の、を、~~述~~述して、乾山の秘書をも、漢つた。深川、情



の境内ニ軒茶屋の内、伊賀... 豆太郎... 乾也
か若らふ、このうれり、も、勢屋の世話をあつた。此の伊
賀屋の主人、この、茶屋を、~~焼~~焼め、大津、~~給~~給、い、を
書き、~~伝~~伝、あつた、と、やり、~~名~~名、を、~~流~~流、井、佛、心、と、~~言~~言、ふ、乾也
い、~~う~~う、う、~~婿~~婿、~~女~~女、~~賞~~賞、~~い~~い、~~ち~~ち、~~時~~時、~~衝~~衝、~~突~~突、~~と~~と、~~あ~~あ、~~と~~と、~~せ~~せ、~~と~~と、~~家~~家、~~を~~を
出て、~~浅~~浅、~~者~~者、~~い~~い、~~お~~お、~~こ~~こ、~~一~~一、~~戸~~戸、~~と~~と、~~持~~持、~~へ~~へ、~~た~~た。

乾也、~~進~~進、~~々~~々、~~注~~注、~~屋~~屋、の、~~御~~御、~~出~~出、~~入~~入、~~す~~す、~~こ~~こ、~~と~~と、~~さ~~さ、~~う~~う、~~蜂~~蜂、~~須~~須、~~公~~公、~~屋~~屋、~~や~~や
杉平、~~屋~~屋、~~差~~差、~~さ~~さ、~~い~~い、~~う~~う、~~愛~~愛、~~さ~~さ、~~ん~~ん、~~蜂~~蜂、~~須~~須、~~公~~公、~~屋~~屋、~~日~~日、~~や~~や、~~砂~~砂、~~屋~~屋、~~差~~差、~~の~~の
雞籠の、~~注~~注、~~文~~文、~~を~~を、~~七~~七、~~や~~や、~~つ~~つ、~~の~~の、~~け~~け、~~れ~~れ、~~蜂~~蜂、~~須~~須、~~差~~差、~~の~~の、~~為~~為、~~の~~の、~~う~~う、~~樂~~樂、~~燒~~燒、~~の~~の
衝、~~ま~~ま、~~礎~~礎、~~差~~差、~~の~~の、~~為~~為、~~の~~の、~~ハ~~ハ、~~刀~~刀、~~の~~の、~~鞘~~鞘、~~は~~は、~~百~~百、~~鬼~~鬼、~~打~~打、~~行~~行、~~の~~の、~~回~~回、~~を~~を、~~符~~符、~~入~~入
し、~~た~~た、~~ま~~ま、~~お~~お、~~六~~六、~~年~~年、~~浦~~浦、~~努~~努、~~く~~く、~~里~~里、~~船~~船、~~が~~が、~~来~~来、~~比~~比、~~時~~時、~~の~~の、~~乾~~乾、~~也~~也、~~を~~を、~~い~~い、~~ち~~ち、~~し~~し、~~く~~く
見、~~お~~お、~~と~~と、~~出~~出、~~う~~う、~~け~~け、~~と~~と、~~巨~~巨、~~大~~大、~~の~~の、~~軍~~軍、~~船~~船、~~を~~を、~~い~~い、~~ち~~ち、~~し~~し、~~お~~お、~~り~~り、~~歎~~歎、~~し~~し、~~の~~の、~~ゆ~~ゆ、~~づ~~づ、~~る~~る

と乾也ハ具喬して仕事も千のつかず、朝夕軍艦の多うも
考く、終ニ洋本の造船術を千の入れ、甘藷道から説
明も貰つて、おろそを今得し。試み、成り汽船の雛
形も三個作り、おろ家津屋家ニ献し、又時の関を以
部伊勢守ニ献し、日本ニ造船の先案を達白する迄
人比。此の心算一踏も甚しい乾也。

幕府の世の推移ニ願ひ、洋風の造船術を以、ハ、
本島の人を派ちるゝつし、其の選に中つたのは、藤野大
印と三浦乾也にあり、乾也ハ之んが為め、特ニ才分入
主といはれ、時々三十四才であり、天性異用ハ科学の理解
する故も、乾也ハ一年ばかり和蘭船人の教を受付け、
せん心算を果して、腕に拘る、サツくと仰つて来れば、幕



府の後人ハ乾也ニ造船を命ずることを躊躇し、そのあ
か致るゝ早いかと、とる出来事のこと思つたから、
乾也ハ船も不平にあり、然るに仙台藩が造船の企
かあつたので、大規模なものを、元持て、乾也ハ推挙を
せ、彼んハ主人ハ仙台ニ赴き、安政四年の夏、流る軍艦
を造つた、んが日本製の最初の軍艦が、艦名ハ開
成丸にあり、乾也ハ自から船を仙台海岸を乗る、思
し、遂に品川湾まで、つて来て、人を教ふあり。

乾也ハ仙台に、十年ばかりも、関係を繋ぎ、其の内、藩内江が
あり、執権者も、代りつた、乾也ハ江戸人、ゆつた、友々、偉く
うつた、彼ハ物工の、田舎、造る、こと、も、出来、お、ぬ、山、氣、を、起
して、お、お、飾、び、一、ト、儲、け、と、企、図、折、角、方、々、から、資、金

を借り、銀塊を穿るの集めれば、伊弉の沈元年の維新と云ふ
比の其計畫が画録と申すは、是より多き事、彼人の朝敵
伊達に關係があることその物語を入牢の身と云ふは、志
かし難が解けて出獄して後の実用のため、後よりし
れば、晩年の振るさうつれ

乾やりの子がさう、懇意にありは画家鈴木我鳥湖の子
を貰ふに受け、是も石井の孫娘を娶はせ、養子を出し湖
と名づけ、さう俗を書かせれば、石井佛心といふ且離縁の
形と云ふその比、後より和解せん。石井の家にお侍人が
さういふから、鼎湖をして其家を継がしめられた。今の石井
稻喜は鼎湖の子のさうから、乾也といふ重縁のある。乾
也の豪族の男の奇行が多かつた。

○横濱貿易の報二枚を穿る日と来た人があり、其
おのち本と名前(市橋通(市橋)かあるか、知人が
いかにあるか、自らの大隈屋に随伴し三河屋
を這の比際のことか、夢物語のやうに出て、おのち
の隣に居家、おのち人がおのち、大隈屋が三河
屋に就て批評を述べ、まんがうの悪縁がある
は、おのち。昔か自らの關係してあるから、その
部分の女を愛し、おのち。

十月九日

大隈大侯と語る (齊東野人)

大「外交論はもう君に卒業證書を授け、いや先生以上だ、早稲田宗から別に一派開いて貰おうかのうアハ、ハ、時に君も横濱に破年三もう十一歳か、随分長くなつたのう、美術は三溪大聖卒業か」

「いや卒業どころか時々伺ひに出る講義生の格でございます、三溪園に申しますれば先年閣下がお遊びにお出になりましたあの桃山御殿を首め、園内の古建築が七つまでも國寶に編入されまして、園主も、市民も大喜びでございます、三宅君の新聞に『國の寶』云々面白く書きました」

「そうか、それはたゞ園主の面目や、市民の誇ばかりでは無い、全く國家の慶福だ、古い日本の新しい政治だよウム、この七つの建物には行基菩薩の建立に係るものもあらう、千ノ利休の設計に成つたものもあらう、七つの建物は、それ、ハ、ハ、ハ、偉い、偉い生みの親がある、この七人の生みの親は皆若々日本人の偉い祖父様だ、然し、幾ら偉い生みの親が生んだ立派の子供達でも、美術もわからぬ、歴史も知らぬ無理解者流の手に渡れば、危く命は無くなるのだ、それが原君さいふい、お父さんの處へ養子に来て、立派に育てられたのだから、原大侯はつまり七つの建物の養ひ親、育ての親だ、原君の着眼と功績はた

いたものだ、原君自身がまあ國寶のやうなものだ、あの時吾輩は市島君(政進)以来の稲門の領土、今の早稲田大學名譽理事、藪野氏(龍峯)を連れて来たが、市島は周囲の景色を觀、庭内の風致を觀、建物の結構を觀、裝飾の安排を觀、感嘆賞讃のしついで、瑛頭、横濱に過ぎたるものは此の三溪園だ、三溪園を下した、それは同君の三溪園を訪ふの記(早稲田大學出版部發行春城筆語に載す)に公然そう書いてあるが、これは三溪園を讀むの餘り、横濱を眺めたことなる、横濱市民は一つ市島に名譽回復の訴訟でも起すか、開港以來、日本貿易を背負つて立つて来た横濱だ、日本の心な寶ものあらう、日本のごんな大人物が居らう、また君のことで無いよ、横濱に過ぎるものがあるもの

か、市島春城は文章家だが、まだ文章がまづい、吾輩なら、帝國の大立國權にふさはしいものは實に三溪園だ、さうか、かの、アハ、ハ、ハ、それからあの時吾輩は原君や市島君の前で無遠慮にいふた、吾輩は骨董は嫌ひ大嫌ひだ、然し、紳士紳商が、さうせ骨董を弄ぶなら、望むらくは斯ういふ大骨董に着目するやうに成つてほしい、ちつぱけな品物に方外の大金を吝まらずに投げ出して、而もそれが偽物であつたりするやうな類は、吾輩の甚だ採らぬ所だ、だから、さうせ之を弄ぶなら、この建築物のやうな大規模のもので、且つ歴史的價值のある大骨董に眼をつけられたいものだ、さな……あの時は吾輩も園内隈なく歩き廻つたが、それでも、この脚のこは全く忘れて居つたよ」

標原製

「誠に御高説の通りでございます、御高説の通りでございますが、骨董にも一ト通りの通はございませぬ、矢張本當の通は中々ございませぬ、まして數の少い富豪杯の中には殆どございませぬ、經濟力と美術眼と双方兼備の良將は、天下の名士悉く集まる閣下の門にも御發見はいかがでございますか、成金は風の吹き廻りで、兜町の青二才が一晩の中になることもございませぬが、二代味を知るご申しますやうに、食べ物の味がよく解るやうになるにさへ、三代もかゝるご申します位で、眞に風流さか、美術さかの解るやうになりますには、遺傳やら、環境やら、それに修養やらで、先天后天、種々複雑の條件が入りますから、閣下の仰せのやうに、金持が道楽をするなら、斯ういふ風にせいで簡單に申されまし

ても、その金持が、よしんばそれをしたくとも、それが出来るやうになるのは、大抵のことでございませぬ、一代では勿論のこと、二代三代かゝりまして、其、池に其性質傾向を持たぬものは、てんで、できません又其血筋に其性質傾向が、よしんばありまして、後天の事情が餘程よく運んで行かぬさいけませんから、原さんのやうなことの出来るのは、百年に一人、二百年に一人、まあ偶発的に出来るのでございませぬか」

「ウム、ウム」
「さればでございます、閣下の御高説は、それは誠に高尚の理想でございます、この高尚の理想を以て貴族、富豪を指導されることは結構でございますが、其實現は容易ではございません、横濱の自慢ではございませぬが、三溪園外に三溪園を求むるのはまあ御無理ではございませぬか」

「ウム、ウム、今日は大隈君信、まるで、野人君の高説を拜聴に出たやうぢやのう、だが、君の議論は却々面白い、いや正に其通りだ、吾輩も裏書をしやう、思ふことは何んでもさういふ風に、さし、いふに眼を、國民が皆さういふ風に快調にならむと、大國民にはなれぬ、政治外交の進歩も、文學美術の發達も皆大國民の産物さ、吾輩の大理想はただ大國民を造るだけさ、不純の心持の美術の嗜好は畢竟骨董屋根性、主義主張の件は無い政敵の爭奪は、博徒の繩張り争、御殿女中のやきもち喧嘩同様ぢやのう。アハ、ハ、ハ、」

〇文行巻に高橋仙果(三代目程彦)自筆の合(一)巻
出題干冊を乞ねぬ、自著の書、物録のみあり。其内
十徳北城紀行といふ、誰人の著か、分明(一)といふが、其郷
土の化(一)のありから、辨(一)のあらぬ。巻首(一)

文久三年北城紀行

八月十日に出立、清水北城淵路見合出役

津島定出役 森坂太夫

伊善清後 寺坂景一

とあり。隨員十名許の名も列してあり。著者は士
徳(一)北(一)一(一)行(一)内(一)の(一)事(一)を(一)お(一)述(一)せ(一)る(一)が、以(一)ん(一)び(一)今(一)ら
までの、今上御(一)政(一)の(一)漸(一)や(一)く(一)開(一)る(一)に(一)際(一)に、幕(一)末(一)清
和(一)路(一)開(一)路(一)見(一)合(一)の(一)記(一)を(一)得(一)た(一)と(一)ぬ(一)る(一)事(一)也。清水北城



各所の記もあるが、終(一)に(一)北(一)城(一)後(一)入(一)り(一)の(一)新(一)河(一)東(一)他(一)の(一)地
に就て、一(一)の(一)記(一)が(一)あ(一)る(一)は、往(一)り(一)の(一)餘(一)を(一)挿(一)入(一)し(一)て(一)北(一)城(一)後(一)見(一)合(一)と
ある(一)に(一)あ(一)る(一)所(一)に(一)お(一)も(一)と(一)る(一)味(一)を(一)乞(一)ね(一)る(一)は、江戸(一)婦(一)人
のお(一)顔(一)を(一)乞(一)ね(一)る(一)書(一)の(一)あ(一)る(一)は、美(一)股(一)を(一)乞(一)ね(一)る(一)主(一)婦
のお(一)顔(一)を(一)乞(一)ね(一)る(一)一(一)見(一)行(一)り(一)女(一)の(一)事(一)が(一)判(一)り(一)得(一)る(一)術(一)類(一)に
陰(一)入(一)氷(一)を(一)乞(一)ね(一)る(一)田(一)農(一)婦(一)が(一)こ(一)を(一)乞(一)ね(一)る(一)田(一)古(一)也(一)
の(一)事(一)跡(一)り(一)の(一)田(一)溪(一)築(一)の(一)田(一)古(一)也(一)揚(一)屋(一)の(一)田(一)古(一)也(一)等
者(一)夜(一)合(一)お(一)行(一)の(一)田(一)を(一)乞(一)ね(一)お(一)ち(一)り(一)り(一)り、往(一)り(一)土(一)音(一)の(一)お
か(一)り(一)を(一)乞(一)ね(一)し、飲(一)食(一)の(一)異(一)を(一)語(一)り、雪(一)中(一)の(一)江(一)を(一)乞(一)ね(一)る(一)の
極(一)深(一)途(一)の(一)雪(一)圍(一)ひ(一)の(一)田(一)を(一)乞(一)ね(一)り、一(一)度(一)竹(一)槍(一)を(一)乞(一)ね(一)る(一)事(一)
がある(一)は、北(一)の(一)著(一)者(一)の(一)大(一)胆(一)な(一)北(一)城(一)後(一)を(一)乞(一)ね(一)る(一)事(一)也、今(一)上(一)御(一)政(一)
か、仙(一)果(一)に(一)列(一)り(一)た(一)事(一)也、ま(一)ち(一)湯(一)を(一)乞(一)ね(一)る(一)事(一)也、(一)

の詳細の記がある。杉の追討は成りぬいけず、杉年
とあるから杉の追討に終った。母の終りもあつた。は既
本無界二冊也

十一月十日記

○法皇が七十九の高齡に在りて美を見られた。自分
の病後二面一に高田が早大徳を辞任するこ
つきの日の諺解を求めたる為の事。法皇に侍せし。取
て直接面談を欲して法皇に諺解を無かつた。か
早朝王子の御出立の御儀も出立
ておまいの御刺を通過して執事の出勤を待つて
あると、おの面合せと云ふ事、この面合せに三十
分計り話して、おの御出立の御儀も御出立に御出
まいと云ひ、早大の大如る御出立の御儀も御出立



度と云ふと云ふ、御出立の御儀も御出立
ぬと云ふと云ふ。おの御出立の御儀も御出立
さるの御儀も御出立の御儀も御出立
て今云ふ此の御出立の御儀も御出立
書きつけて示すことと云ふと云ふ。成る不
いさうと云ひ、御出立の御儀も御出立
来りぬ。其後一二分自今、御出立の御儀も御出立
出立の御出立の御儀も御出立の御儀も御出立
流るる。御出立の御儀も御出立の御儀も御出立
御出立の御出立の御儀も御出立の御儀も御出立
御出立の御出立の御儀も御出立の御儀も御出立
御出立の御出立の御儀も御出立の御儀も御出立
御出立の御出立の御儀も御出立の御儀も御出立
御出立の御出立の御儀も御出立の御儀も御出立

がある。

早稲田氏が志願く基金を集めて都府を
を煩わした。大急いにおも基金を配る者も奉け
なく母その病も治らな。大隈が大急の人を急
し、莫命金の勸誘をせよ、場合入いつてもあいな
る。即時先が自分もし寄附を申出しても、他の勸誘
連中が通過の二郎下、机と筆研を揃はしてあ
る。その出づる寄附帳をささげついで書かす
にこそすくめさ。おの主張を云く、公共の爲めの寄
附人主莫命集る絶對にシースは無いと云ふて
不景氣を口實とするのを排斥せられた。曾つて

東京

おの大急、初めを久原富し世を訪はれた。保こ久原
は病苦を、其の病が、病許をえし病床にあり
張る何おも寄附の勸誘をせん。其の病が、病許をえし病床にあり
いふ、あなれやうる金満家も社会も必要
だが、そのやうる人の金を出せるといふも亦不
必要いふら。おの斯くして憶面を、誰か
寄附を勧めん。大急が、おの病が、他の病に
ら世の寄附七程、おの病が、他の病に
かあるが、この病の一面を語る、よめある。

おの雅辞を、おの病と云ふ、おの病の實家が、莫命集
を云ん、おの病と云ふ、おの病の實家が、莫命集
史と云ふ、おの病と云ふ、おの病の實家が、莫命集

七実：頼も運ん腰ぬけであつた。或る剣客を
捕縛目するやえん出強とまると、暗懐れを行くよ
か無いの、自合のやうなるよか、色正を得ず捕吏
を卒へて出うけれと云らん、まんる具合比から幕
府の倒れ比の古無理なるいと云らん、幕末の民兵
を幕府の時七、おの共衝つた。こんど、就て面白
るい流がある。往年大隈侯と海軍おと、お推して
岡山へおらん比のことある。自合七、同様比、汽車が
目少おの支体津神社のちやうとあること、比時、お
ハ、往るを、進懐れ、往り出さく、えん、幕末の幕
兵、又自合比、比、未比、比、ま、年七、若かつたの、
此、比、の、始、構、に、登、つ、た。翌、相、駕、馬、目、出、方、す、と、



駕、此、脇、の、草、履、も、穿、い、目、れ、女、が、あ、つ、の、七、何、か、と、思、
と、前、夜、の、婦、婦、が、赤、い、靴、出、し、を、露、く、し、え、ま、さ、の、心、あ
つ、た。こんど、比、を、こ、り、凡、習、む、ま、と、敬、意、を、拂、お、の、い、あ、る、が、供
執、り、も、あ、つ、の、い、面、目、と、つ、お、し、比、と、云、つ、て、天、ん、比、こ、
か、あ、る。お、い、エ、の、よ、か、け、を、い、條、倫、い、あ、つ、た、ら、だ。
実、業、界、何、か、縁、儀、が、知、つ、と、あ、つ、お、お、こ、り、の、縁、絆、を
あ、く、よ、の、無、つ、た、お、の、御、く、い、原、を、被、先、七、押、し
寄、を、比、よ、の、比、お、の、當、つ、と、親、れ、る、自、合、の、家、の、勸、解
裁判の法庭、なるや、ら、比、と、云、の、ん、れ、が、お、の、依、つ、と、納、保、さ
れ、比、百、件、の、い、ん、不、と、あ、つ、か、知、らん。お、い、書、畫、骨、董、一、を
い、を、弄、ぶ、人、の、無、つ、た。活動が、乃、ち、あ、の、人、の、性、一、の、改
味、い、あ、つ、た、や、ら、ん、あ、つ、た、お、の、書、を、よ、く、一、詩、も、心、つ

此殊な論議の道徳が深かつた。自分が爲す事を
おぼしめ、前島密男の生誕碑を建てる方り碑面
の字を求めた跡の大いなるあるが立派な出来た。あ
りあつた時にも論議をせよと置かれた跡子だ。いつ
ぞや病後の跡に湯ヶ原の徳会に居ると居ると時
訪ねて見ると又此の論議が重んじられてあ
つた。徳会の中稀觀の論議古物本の論議を
集めるといふが、おのれは結婚の積徳陳重男の勧め
依つたよむであらう。おのれは流転中へいへ論議を
引かぬ。流転に生計がある。その引きたまふかよ
く指つて人の感動を誘ふ。あつた流転のあつた
ハいつか通ぬであつた。あつた流転のあつた

徳会

上平のあつた。再米利に出入りした時、家の
説の皆境を度して巧みであつたと随行者から
（此）ことがあつた。

齡九十二の事を保つてあつた。働いた人の
一七七のあつた。遺域のあつた。唯此社会に取つて大
く損失がある。

十一月十日記

○閑を任せて仕事を漫ろにせず、此に
星上達の道徳が、デンに印を宛いたか
あつた。唯此に星上達の道徳が、デンに印を宛いたか
吾身抱つていつた。星上達の道徳が、デンに印を宛いたか
織物のあつた。星上達の道徳が、デンに印を宛いたか
万葉のあつた。星上達の道徳が、デンに印を宛いたか

すむん暇下こ墨田川が流れてる側の道が、デンセン七丁目
の由、収まり、或の川の長橋七、往來の人終、得ずの人も、車
七、皆、眼、界、を、さ、る、ま、う、遠、く、本、國、を、洋、向、の、人、家、も、千、二、元
の、こ、と、く、見、へ、て、弱、く、雄、大、の、景、を、見、て、魂、を、死、し、ぬ、れ、恐
ろ、く、こ、ん、を、お、も、い、ら、ぬ、も、い、都、の、ま、あ、こ、ま、い、を、車
洋、に、あ、る、ま、い、と、思、い、ん、れ、久、七、淡、谷、に、お、よ、ぶ、登、り、
馳、眺、ま、す、き、む、あ、る、。

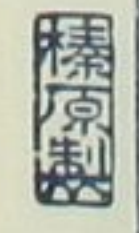
男、寺、前、此、本、の、の、御、聖、城、後、中、錦、味、部、津、の、寺
池、部、に、前、年、生、誕、碑、を、建、て、ま、こ、に、前、島、紀、念
の、郵、便、局、を、設、け、れ、引、つ、き、紀、念、の、郵、便、局、物、館
を、行、堂、一、に、か、い、通、行、者、が、接、助、し、て、通、行、者、を、使、し、
通、行、者、を、暮、り、一、萬、圓、許、の、通、行、者、に、建、築、す、。

かり、ま、い、か、な、い、し、る、未、十、七、の、開、校、式、を、奉、り、ま
い、の、進、入、に、此、館、の、物、品、の、ま、く、の、通、行、者、の、郵、便
物、品、の、物、品、を、使、付、す、こ、と、ま、り、て、お、ふ、ら、
皆、お、彼、の、体、裁、を、具、つ、て、あ、ら、う。男、寺、の、生、誕
地、の、偏、僻、り、に、あ、る、か、く、人、を、惹、き、つ、け、る、ま、い、此、館
の、又、物、品、が、無、く、こ、い、こ、う、ぬ。自、合、ハ、生、誕、碑、を、ま、い、
際、か、ら、行、々、と、お、旋、し、ハ、今、日、也、作、お、敷、三、十、四、許
と、自、合、の、手、で、^{（？）}つ、て、や、つ、れ、縁、田、が、あ、る、の、か、こ、い、ま、は、
通、と、照、叙、し、て、お、い、。

●此、次、二、三、の、名、所、を、い、く、ま、を、攝、ま、る、名、家、の、墓、石、の、お、在、
を、知、つ、れ、の、を、奉、り、と、太、平、春、其、の、墓、石、が、谷、中
板、竹、天、照、寺、の、り、ま、い、お、彼、徒、の、墓、石、三、田、豊、子、可

長持寺内、あり、寶井女角の墓、都下二三ヶ所あり、
真に骨を埋め此所、芝二本横町上行寺内、ある、
等々、と云ふ

皆来日本持三破入柱と稱知社主僧の茶の由未長持
今か開かん宇沈の貴葉三尾の高山寺、建仁寺南
源寺東福寺が茶、関係ある寺々の寶物、
陳列せん、茶五折、多く即ち、と云ふ、と出陣、
の比、今坊、北次、高山寺、の通上人の記念の巻め、
つれなき、香房、をとり、身、換、て、あ、つ、れ、宇
沈、茶、桶、の、光、景、と、人、形、の、を、を、り、と、あ、ら、
か、利、休、の、茶、日、お、く、家、人、形、の、あ、ら、
何、も、か、の、俗、氣、持、つ、る、二、三、の、を、お、つ、つ、お、る、今



日、ん、や、脱、保、の、信、じ、あ、保、し、法、寺、の、墨、跡、を、
か、た、ま、お、も、し、ろ、く、感、も、あ、の、もの、無、つ、れ、高山寺
所、在、る、の、ゆ、え、上、人、遺、棄、の、が、数、跡、一、百、三、
年、の、高山寺の古園持守家、茶を献上の時の、
搬の輿、と、い、か、僅、か、目、を、惹、い、れ、相、互、茶、の、
遺、る、と、い、く、か、少、て、お、れ、か、活、物、と、ら、ぬ、心、地、
○余や、お、馬、御、見、等、と、監、修、者、と、北、次、茶、の、十、冊
の、刊、行、を、計、画、し、ま、あ、り、今、刊、未、つ、て、見、由、に、
圖書と、別、大、抵、名、の、ま、り、て、お、る、と、い、
し、持、下、来、る、余、の、卒、何、を、取、り、き、や、を、示、定、
試、み、家、名、の、回、り、目、録、就、て、紙、の、
類、を、秘、考、査、し、ま、三、十、数、種、を、
取、め、し、

古くより今に、多の日と奉く

、新法田寺三理

、火渡布取説 里四

佐州村鏡

、古河日記 三

新河巻記

、小宮新河経歴文

、士徳心紙記

、城後土寇始末

、城後南弥彦神社取説

、城後稿志 二

、城後土産 二



城後方言集

乙寶寺縁起

新河寺校田抄縁 自撰

城後各名所の文字 自撰

杉原親憲事略

弘業後事略

明治七年新河取説布取 二

北河日記 二

乗合日記 一

北河日記 三号

三浦村巻行

北河古今行説

昭雪集

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞



新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

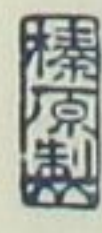
新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

新編の身向回詞

泊舟板入る、奥平岳（奥平岳の事）三休渡古蹟 真野墨務室の記
 牧野子音の傳の泡草下 三陸地志記 淡路の古名記
 大河津記録 親書上人車蹟 松後上布 五家平
 山延里圖 茶人宗悦 大極元火一件（生田萬）里田
 玄翁の石俤（玄翁の著）宗悦の著玄川（玄川の著）松海漁遊
 松後人物志（松後人物の著）の著 松後三雅集 北城不印の
 歌（歌の著）確（確の著） 却々傳之記 井上桐玄 桐玄の著 群芳山
 松竹書房の叔父人きき市茶の園寺の又名を以て
 家系に無きよと傳ふ出の逸るを採録し來りて
 と在りぬ
 十月十三日記



エチオピア帝國(俗稱アビシニヤ)概観

●今回我が國と通商修交條約成り特派大使としてヘルイ外相等一行を派遣せるエチオピア帝國はアフリカ大陸の屋上^{ウツツ}と稱せらるゝ高原地で、同大陸の東北部に存在し、面積は日本々島の約四倍其の周圍は英、佛、伊の三大勢力に包圍せられ、海岸線を有せざる陸内國である。山間には沼湖多く、風光明媚なるが故に「アフリカの瑞西」と呼ばれる。これ等沼湖の水が落ちて「青河^{ブルー}ナイル」となる。エチオピアの土壤は非常な沃土であつて水と共に流れ落ちて埃及平野を豊饒なしめる。斯の如くエチオピアより、水と食物を惠まれつゝある埃及はエチオピアの息子だと云はれ、史上燦然たる埃及文化はエチオピアに負ふ所大なりと云ふ可きである。

●エチオピアは熱帶地域にありて、海拔八千尺に及ぶ高原國なるが故に低地部は砂糖綿花及竹類等の熱帶特有の植物が繁茂し、中部には到る處、盛に珈琲が生育し、重要國産品の一つに數へられてゐる。實に Coffee の名は、エチオピアの Kaffa 州の、地名が轉訛したものと云はれる。愈々、高原に近くに從ひ、温帶生の植物や穀類が盛に生長する。首府アチス・アババは「新しき花の都」の意味を有し、國內最高地に位し氣候温和、四季を通じて春の如く、常に百花爛漫として咲き乱れてゐる。一八九六年

この國が伊太利と戦つて大勝利、戦勝記念のために、創設したる新興都市で「新しき花の都」の名にふさはしい。

●人口は約一千万。人種はセミ化したるハムにニイグロの混血したるもの。國體は君主國で、日本人に取りて特筆大書すべき事は、エチオピアは國祖「メリニツク一世」以來、三千餘年間、一系の王統、連綿として、今に到り、同國人は之を以て大なる矜持とせる事である。加之建國以降、外辱を受け、獨立を危殆ならしめたる事無きは頗る日本の國情と一致する。一九二六年、六月十九日附、國際聯盟加入諸國宛の「エチオピア攝政の抗議書に『我國は有史以來、未だ曾て外國の爲めに國土を侵され、其の獨立を危くせられたる事なく、神靈の加護、將卒の武勇により、常に幾多の困難を排し、以て國家の安寧を保つことを得たり』とあるが即ち其の證左であらふ。

●國內には封建的色彩を有する諸侯^{フイキス}が毎年又は二、三年に一回首府に參觀交替する制度があり、國人の總ては白衣を着け、且つ多くは武装し或は大刀を佩き、或は長槍を持ち、又は鐵砲を擔ひ、身分ある者は肥馬に跨り、槍持、鐵砲持等を從へ、恰も江戸時代の風俗畫を展開したる如き奇觀を呈するも總てが洗足^{はだし}であるのは聊か恐縮に價すると云ふことである。

●我國よりの輸入品は、同國人の衣類に供せられる生綿布で、一九二六年の輸入高は英領印度は六割三分日本は三割四分を占め殆どみぎ二國品で獨占の状態である。日本粗

布の需要は極めて多く、この地方住民の生活向上と共に其の他の貨物の需要も日々増加の傾向あるも、未だ日本商人入込まず一軒の日本人店舗も無く、日本品の買込は印度商人の手を経て行はるる状況であるのは甚だ遺憾である。

●この國の一ヶ年輸出高は、コフィ約壹千万圓、革皮約八百万圓、其の他蜂蜜、象牙麝香類で合計百万圓、輸出金額約二千万圓位、輸入品も一ヶ年二千万圓位で其の過半数は衣服材料の木綿で日本製輸入品が八百萬圓乃至八百五十萬圓位に達する。

●産業は農業第一で大麥、小麥、亞麻、黍、玉蜀黍等の産多く、大体自給自足し得る近時は漸くコーヒー綿花等を外人の手に經營せしむる事を許す様に成りつゝあり、永き鎖國の夢から醒めた未開發の地とは云へ四時花を絶たざる、常春の國、三千年來一系の王統榮ゆる國、尙武剛健未だ外侮を受けざる國と大發展を必要とする我が國と新なる通商條約が締結せられ、將來關稅政策等の改正あるとも我が日本は最惠國の待遇を受くる事は明かである、我が識者は此の新朋友邦に向つて、商權の擴充、新市場の開拓に努力せられん事を望む。



○文行書入於也と逸了川故聖漢支まの詠る
聖漢の漢出爲華、換伸いと累一ある白華、
婦心入る。聖漢詠るの四る八十二首とぬめりよ
紙をもとす、七雄黃女、妻高子の詠るの奉
四の折荒干枚のと日本うそこの七雄黃入り
支まの前田夏産の門人るん、七雄黃の夏産
るん、換伸の一書、界紙本も漢出の不感
をす、
未比番しく見るとまあるとん、
治家の後えをるの論あり、
詠る今心の心をたに物す
十一月十日

赤海は徳

る河のたちわつ万世とすーもせす濁るもあき
わはつこのいろ

乾卦

淵にありみあまうりこそくにあうえ連て
よく時をしる龍あふる

坤卦

こころせよ夜おとけさあけさ
氷の結あをーのくは

天水訟

あらしみの涙をへばそくとあはふこころは



もこのあふるいろ

すこひつそくしこえーもあまうりぬ

あらしみの涙をへばそくとあはふこころは

山家夜

かよんくうけひのあひの音はこも

更の夜はそつく山家

山家句

よ張さてー山の奥も捨はつ

朝も夕もあつそくは

山家庵

我のみの心はあはれのーこも

たのーみえすあ山家との庵

煙草

きえんを雪をいひこくうつ火

灰と成の末を志まところ

梅風

梅う、伐次おくるは花まうき

春風とりぬおむひる

山家杉

風を迷坂新とよるんことたう

軒にりき山の杉あら

夜山

日をさあふ松と谷の苔清み

夏こそ山はまらふあうけ



おる連徳

たてし思ひ忘の山をこ

踏まらうまのこ

山家夕

世を捨しむもをりくハタく道を

たごかきひくおむら

地師

あつ方見え路も力増まらかぬ

土とおとの姿を

空眺

花雪も葉るあまの山

遠くうすむの人の

成す所の方便とてかえりながら高きかあるのかしらぬ。七
つ掛けは、此處から回路又回路してにまきん、終る
印交は、故のんを自治を得るまゝに、利をか七、利ぬぬ
英政府の取つて無抵抗主義の空手正法である
か、知ぬぬ、幼く微温の行動も、利も、後、歴山出来
お、を、し、車、の、回、轉、と、共、こ、時、計、の、ペ、ン、ジ、エ、ラ、ム、の、振、ん
と、共、こ、厚、さ、ろ、ろ、も、日、回、氏、を、日、回、達、成、の、尊
き、つ、い、あ、る、の、也。
十一月十日夜
○十一月廿日夜、安田善治の宅に稀者、復を、今、
同人、集、今、主、人、も、四五の、宮、廷、を、未、だ、も、道、長、の
宮、廷、ゆ、ゑ、全、泥、め、間、設、室、切、替、か、あ、り、就、中
珍、く、し、く、笑、く、た、り、左、の、二、點、と、す



悉也宮記

巻尾に、全別岩寺に、最、考、と、あ
り、更、々、本、の、一、跋、を、附、し、秋、の、假、か
よ、原、夫、か、出、と、な、り、所、あ、三、年、の
版、す、此、の、跋、の、あ、る、こ、の、稀、こ
る、也、 卷子本

保正四年、主水正頼方の、著、書、宮、と
い、ふ、讀、み、難、き、古、字、の、少、か、く、り、交
はり、あ、る、を、い、ふ、恐、く、く、原、本、に、就、き、古
さ、き、鈔、本、を、字、一、つ、と、推、せ、し、

此、百、余、の、撰、帶、し、る、に、お、紐、練、契、沖、木、お、大、隈、言
述、是、仙、六、新、仙、の、撰、卷、上、行、也、偶、々、漢、会、を、る、

古物考の稿千枚紙を撰く来り置てある。皆に其出
 次字本より皆々翻写す。御書複製物の改訂十三
 年と何と一筆が更なる一期継続と決し複製物
 へき回考と揃議す。此の林若樹翁の未とある
 として塔形●銀章の銘眞を云々。此の銀材は大
 震災の時多くの銀章の溶解しをとり上げた
 のことと云ふ。此の何れも目と認めしる。雪舟筆の
 屏風を双也●かしく六枚ある。墨墨丁他の六枚
 の猿猴を畫く。長閑と云ふ。如何なるものか
 等々も流石の巨匠の筆●と感し、七と前
 田家の為り、と云ふ



舞	扇	金地	三
舞地紙	(徳川期)	極彩色	二五
◎小川勘助殿 御所藏	(徳川期)		
古版千代紙	江戸時代	楮紙	廿二
◎岡田三郎助殿 御所藏	江戸時代		
佛國製マーブル紙	(現代)		數
ミネチユーア			二
◎尾上八郎殿 御所藏	(永曆)		一
東大寺僧綱補任文書	(永曆)		一
◎男爵大倉喜七郎殿 御所藏	(徳川初期)		一
光悦巻物 金銀泥下繪	(徳川初期)		一
◎大隅爲三殿 御所藏	(徳川初期)		一
ブリアベイヤ原版	(十六世紀)	リネン紙	一
新約聖書ギリシヤラテン辭典	(十六世紀)	リネン紙	一
アナクレオン詩集 表紙羊皮	(十六世紀)	リネン紙	一

紙ニ關スル展覽會出品目錄

於新宿三越支店
昭和六年十一月十二日ヨリ
昭和六年十一月十八日マデ

東京帝國大學工學部建築學教室御所藏 八橋太郎繪詞(近衛豫樂院公書・渡邊始興画)色變り料紙一卷 行成紙標本帖 (德川期) 七十八枚 二冊	河内正敏殿御所藏 南蠻パレンコロビの書物 楮紙 一冊 本草圖譜稿本 (德川期) 楮紙 八十三冊 小堀遠洲東海道旅行日記 (德川期) 楮紙 一冊 工藝紙類 (德川期) 數種 古渡唐紙類 (德川期) 二卷 紙衣製刀袋 (德川期) 一具 紙衣殘片 (德川期) 一枚 香ダトウ (德川期) 妻紙彩色 數十種	和野萬吉殿御所藏 歌人短尺類 (江戸時代) 十二点 狂歌短尺類 (江戸時代) 三十点 和歌懷紙類 (江戸時代) 一点 譽田八幡寫經 (鎌倉時代) 一点	和田幹男殿御所藏 尊氏願經 二冊 論語正平版 二冊 法華經 一卷	勝山岳陽殿御所藏 證心堂紙 (乾隆時代) 金銀泥繪 一枚	東京帝國大學工學部建築學教室御所藏 日本建築古圖 (慶長—明治) 全 十二枚 モザイクの本 (佛國巴里一八〇二年刊本) 一冊 梵文陀羅尼白描下繪 (江戸時代) 一幅 傳信實白描下繪 一幅 千代紙蒐集帖 (江戸時代) 二冊 古事類苑紙の部 二冊 紙封筒帖 (德川期) 一冊 封筒貼込帖 (德川期) 一冊	内閣印刷局抄紙部御所藏 抄紙部寫眞類 數点 製紙參考書 數点 明治初年各縣產紙類 數点 印刷局抄紙部製紙類 數点 革紙類見本帖 二点	石田幹之助殿御所藏 支那に於ける印刷術に關するチャター氏書籍 一冊 元興寺經(大乘疏有轉經) (天平) 一冊 丹波國返譯 (天平) 一冊 大政官牒 (延喜) 一冊 田地賣券 (貞觀阿部小水磨願經) 一冊 大般若波羅密多經 (元慶) 一冊 矢田郷田券 (藤原期) 一冊 中尊寺法華經 (藤原期) 一冊 起請文 (應永) 一冊 古文書 一冊 織田信長八將列累文書 一幅 近衛應山筆詩歌卷 五色紙金泥下繪 (慶長) 一卷	石井柏亭殿御所藏 油繪用紙 楮紙 一点 支那繪(通草紙) 一点 紙製張拔觀音像 一点	伊東忠太殿御所藏 トルコ皇帝御署名の勅記 (十八世紀末獨逸刊本) 一枚 高等建築學 一冊 シヤン民族の用紙 (十九世紀) 一冊 支那護照 (清朝末) 一枚 近江國司解 (天平) 一冊	實生新殿御所藏 屏紙 金地 三本 扇地紙類 (德川期) 楮彩色 二枚	小川勘助殿御所藏 古版千代紙 楮紙 廿二枚 岡田三郎助殿御所藏 佛國製マール紙 (現代) 數点 佛國製マール紙 (現代) 二点 ミネチユニア 二点	尾上八郎殿御所藏 東大寺僧補任文書 (永曆) 一冊	男爵大倉喜七郎殿御所藏 光悅卷物 金銀泥下繪 (德川初期) 一卷	大隅爲三殿御所藏 ブリアベア原版 (十六世紀) リネン紙 一冊 新約聖書ギリヤラテン辭典 (十六世紀) リネン紙 一冊 アナクレオン詩集 表紙羊皮 一冊 十四世紀聖人傳 表紙羊皮 一冊	大河内正敏殿御所藏 南蠻パレンコロビの書物 楮紙 一冊 本草圖譜稿本 (德川期) 楮紙 八十三冊 小堀遠洲東海道旅行日記 (德川期) 楮紙 一冊 工藝紙類 (德川期) 數種 古渡唐紙類 (德川期) 二卷 紙衣製刀袋 (德川期) 一具 紙衣殘片 (德川期) 一枚 香ダトウ (德川期) 妻紙彩色 數十種	和野萬吉殿御所藏 歌人短尺類 (江戸時代) 十二点 狂歌短尺類 (江戸時代) 三十点 和歌懷紙類 (江戸時代) 一点 譽田八幡寫經 (鎌倉時代) 一点	和田幹男殿御所藏 尊氏願經 二冊 論語正平版 二冊 法華經 一卷	勝山岳陽殿御所藏 證心堂紙 (乾隆時代) 金銀泥繪 一枚	清廟皇室用紙 黃地蠟箋 二枚	河口慧海殿御所藏 ネパール國產楮紙 近代楮紙 七枚 ネパール國產楮紙 近代經文 一冊 ネパール國產楮紙 近代經文 百廿四枚 西藏國產シヨクツア紙 (十七世紀) 五百三十三枚 西藏國產シヨクツア紙 (全) チベット法王書簡 三百六十二枚 ヒマラヤ六格の製皮 (七世紀) 二百二十枚 西藏シヤール寺舊藏 六枚 古代印度ターラットラ (六世紀) 六枚 常備筆梅花的圖(支那唐紙吹繪地) 二幅	加藤正治殿御所藏 顯補卿鶏切綴後撰集三十枚(五色色蠟箋類) 一卷 紙衣小摺卷 彦殿御所藏 (江戸時代) 楮紙製 一点 染革型紙 楮紙製 (德川中期) 楮紙製 四点	高木文殿御所藏 百萬塔陀羅尼 (天平) 一幅 駿河版殘缺 (慶長) 一幅 懷紙 (寬永) 一幅 文見下繪の千代紙 (寬永頃) 一幅 奈良繪のカルタ 一幅 江戸城大奥の機壁紙類 (德川期) 一冊 千八百年代の西洋各國產紙目錄 (德川期) 一冊 支那產紙標本類 數点	高島菊次郎殿御所藏 朝鮮紙 (高麗) 一冊 パリチメント本 羊皮 一冊 獨逸刊本テトリカ (十五世紀) 一冊 支那產紙標本類 (朝鮮時代) 數点 支那玩具寫經人形 七夕 一組 信州大町 一組	伯津義孝殿御所藏 西行法師歌切 蠟箋表裝 一幅 兼好法師歌切 一幅	辻善之助殿御所藏 二月堂燧線繪款 (天平) 一枚 傳宗梅華詞華和室集(文明) 妻紙 一冊	中村有樂殿御所藏 古昔曆本類 (德川期) 天明ヨリ慶應四年迄 六拾六冊 各種製紙原料類 數点 現代の代表的日本產紙類 數点 屏面用紙類 明治神宮繪圖館用 一点 和紙抄造用具 一点	長田秀雄殿御所藏 武藏詞和本全套 三十枚 連歌卷物 (天文) 一卷 土佐國產紙類 (德川期) 數点	工藤壯平殿御所藏 華殿經(新羅本) 一卷 文克謙書(高麗) 一冊 李廷龜書(李朝) 一冊 金石韻府抄(李朝) 一冊 朝鮮版木類(李朝) 三冊 朝鮮紙類(高麗) 總色紙色紙昔紙白木紙水色紙紙全壯紙 三十八枚 朝鮮封筒類 三十八枚	黒板勝美殿御所藏 近衛豫樂院公筆あるた遊びの圖(妻紙)竹筒入 一卷 燧線出土經斷片 六枚 波斯經斷片 一枚 西藏經斷片 一枚 羅紋紙類(乾隆朝) 三枚 金粟山藏經紙(乾隆朝) 一枚 金粟山藏經紙(乾隆朝) 一枚 綿紙類(高麗) 七枚 朝鮮紙類(高麗) 七枚 加工紙類(德川期) 數十枚	黒澤禮吉殿御所藏 康熙帝(聖宗)御書・朱地蠟箋金泥文様紙 一幅 倉橋藤次郎殿御所藏 朝鮮製紙用版木 三點	安田善次郎殿御所藏 大要武(天平)茶匙紙 一冊 久世舞(德川初期)具引雲母刷紙 一冊 悅本(德川初期)全 三冊	山本東次郎殿御所藏 狂言本(正保)粘葉紙 二冊	正木直彦殿御所藏 古寫經貼交屏風 十卷 道長經(寛弘)紺紙金泥妻紙 一雙 古波詩箋題詞(南北朝) 金泥下繪 一卷 華殿經(宋版) 一冊 博古圖(元版) 一冊 三體圖(宋版) 一冊 山谷詩集(四庫全書) 一冊 イノロヂヤ(十六世紀) 一冊 ローマ法王傳(十六世紀) 一冊 世界著名都市(十七世紀) 一冊 屋島合戦繪卷(箱紙) 一冊 古文書 四冊	前田剛二殿御所藏 胎内佛(鎌倉時代) 一枚 古文書(嘉承) 一冊 古文書(康和) 一冊 古文書(承元) 一冊	松田福一郎殿御所藏 古版佛面(隨大業三年四月黃麻紙) 二枚 古文書貼交屏風(藤原時代) 二枚 寫經斷片(和銅) 一枚 淨瑠璃寺の胎内佛 一枚	佐々木信綱殿御所藏 古文書帖(藤原時代) 一冊	北浦大介殿御所藏 パピラス紙殘缺集 エチプトカイロ出土品 一冊	北大路魯郷殿御所藏 乾隆廿七年滬入紙 一枚 朝鮮古代五色唐紙 一枚	宮田三郎殿御所藏 平安朝ヨリ鎌倉時代の古代紙標本 百十三種 藤原時代の唐紙 一枚 鎌倉時代の唐紙 一枚 機壁紙標本帖(德川期) 數十種 昭和時代複製唐紙 三十三冊 昭和時代複製唐紙 一冊	侯爵尚祐殿御所藏 水墨山水圖 一枚 榎山髯華殿御所藏 理趣經 理源大師筆 一卷 七祖像圖(元久) 一卷 胎藏圖像(建久) 一卷 佛傳圖 玄證筆外一点 一卷 岡寺心經 彪殿御所藏 一卷	關彪殿御所藏 スタンイン博士發掘古代紙(第七世紀) 四片 原始的製紙(ダート・ハンター著) 一冊 十八世紀間の製紙(ダート・ハンター著) 一冊 美人紙譜の繪卷(貞秀) 一冊 英國製現今の手漉紙見本 一冊	杉浦非水殿御所藏 一茶筆 善光寺傳來 一幅 支那歴史風俗史料 十二点 支那色唐紙類 數種 支那製紙工程に關する圖解 數点 グラントハルバ 一枚 製紙見本帖 二冊	越前産紙同業組合御出品 大東紙類(西野殿) 一冊 大鷹拉紙(同) 一冊 大春書紙(同) 一冊 鳥の子紙(同) 一冊 局の子紙(同) 一冊	美濃紙同業組合御出品 三ツ折書院(古田彦四郎殿) 一冊 傘折書院(木村金之丞殿) 一冊 四ツ折書院(古田久四郎殿) 一冊 書院(古田宗五郎殿) 一冊	伊豫紙同業組合御出品 奉書紙 四點 泉貨紙 一点 伊豫紙見本帖 一点 水引紙 一点
---	---	---	---	---------------------------------	--	---	---	---	--	--	--	------------------------------	-------------------------------------	--	--	---	---	---------------------------------	-------------------	---	--	---	---	---	--	--	--	--	--	---	--	----------------------------	---	--	--	----------------------------	------------------------------------	---	---	--	--	--	---	--	---

主催 日本工藝紙協會

2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50

○近年市街電鐵開通して、奥多摩の溪谷
美如ゆゑ人の賞玩を供してゐる。東京のちよと近き
溪谷美のこんとちよと、山に休日の多敷都人士の
採勝を試みる事ごとく、余は年一たびを
試みる事、仔細に溪谷を、就し古蹟のたりしを遺
憾とせり。偶に園考故、同人の所、乗船一日のド
ライヴを試みんとす。冬加し、夏に舟遊するこ
とよりなる。今、お多摩のぬたの舟を採勝する自
動車尤の便利あり、余等、朝、新橋駅に
七人の四人と待合、二台の自動車に合乗し、先づ
新宿に到着し、まゝ五川に到着。余、中、先づ、五川
車庫市にて待合し、ちよと新築地(多摩野原地と云

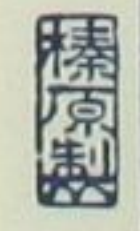


ふ)を一覽せんと、まゝに五川あり、こゝは溪谷を、武蔵
野平原の一部を、青山麓地に比すんば、或倍の大規
模なり。自然の森の樹木、おのづから、多敷境
を飾り、一柱が園の如き風致あり。既に、墓
石の立ち、長るものあり、客を待つ茶店、軒
をづく所、石工の店鋪も多し。又、受けけり、車を
下りて、樹を散策する事、低徊する能はざるの
風情あり、態と此地を散策する事、一息と
一息。五川駅を空車に、過ぐる事、一舟あり、
のち飛行機を覗き、初めとす。流石に大
規模なり、他、の杖路を先く、ふんか、格
納庫、七深山、又、受けけり、こゝも、恐らく、他、

更なる増造の日名堂あり。外田の飛行橋の着
たること。東京の人の飛行橋に乗ることも、と
未らざるを得ぬ。三川野の橋、殷賑をかくれ
るに備わりのあり。羽村の、東京市上水道の
多摩川入口あり。堰を設けて、設け、壯觀の
跡、極め、風致あり。水神初を、下車して探
訪す。此水、深き地を、却、都人士の飲用とす
る。羽村の、青魚の、云々有名なる。北清、ありとも
見せう、あり。此、まも、ち梅、あり。村、あり。百
物、皆、黄ばん、ひ、第、庵、を、飾り、黄葉、の、村、を、出
て、赤黄、葉、の、村、を、入る、の、概、あり。日、を、推、し、ち
つこと甚し。ち梅、古、未、綿、の、集、散、地、と、も、を、云

ある不ろろ。溪、深、美、い、津、井、と、も、あり。と、始、まる。
駅前、下車、し、探、訪、あり。近年、夏、祭、あり。地、の、高
り、寒、山、寺、を、摸、して、一字、を、建、つ、よ、あり。地、の、高
丘、あり。お、し、釣、橋、を、架、して、寺、と、相、通、す。橋、に、楓
橋、の、扁、額、を、掲、ぐ、亦、一、名、法、あり。好、ぶ、る、を、得、べし。
此、祠、を、を、設、け、け、り、由、来、の、後、附、載、の、印、刷、物、に
詳、か、ら、ん、心、略、す。此、橋、下、の、溪、流、を、橋、の、瀬、と、も、い
ふ。一、景、あり。を、見、り、射、山、谷、あり。此、の、上、流、あり。
橋、時、の、一、寺、あり。憩、あり。支、酒、三、杯、酒、を、飲、む、時
分、に、十一、時、也。こ、ん、も、梅、の、此、景、あり。射、山、
溪、の、流、あり。ち、梅、主、堂、あり。と、も、を、期、し、ち、梅、
橋、の、此、景、あり。車、を、乗、り、崖、の、下、り、と

二下計りしと漢流の橋するの地を造す仰き見の
の巨山を錫立の間に漢流あり白日相すこき威
あり、茶店に設けたる席に入ら一行行厨をひら
き午飯をも喫す、茶店の示しを即刷相り
徴するに、明治の大火の後、此の材木を此
地より採りしとあり、今も此の流域に材木材を
多く運搬するを見え、此地の山は石の雄健
なり、下りし道を登攀す。丸骨往年大患の
の罹つて後、登攀す、艱難、運轉、千の背後よ
り橋の押す力を得て卒のしと登る、その窮
状笑ふ。此の山は馬の奇蹟あり、西岸



の峻峯、徑可い立ち、漢流を鑑む、道は
日山を穿ち、穿ちたるトンネルあり、風光在也、亦
車と地を氷川とあり、此漢流の奥多摩の
と日原川と合流のする、一橋あり、加末、眼水
橋といふ、全村山岳を望し、山あり、奥沢
川神社も拜し、一橋を渡り、音岩山あり、地
す村の畑菜の競進、即ち合もひくくをり、
入つて山百合五十個を購ふ、價を問ふ、僅
き四とあり、唐草、一半を割つて一行の飲
一斗を家草とあり、氷川、今次、ドラッグの
店、このものを均金に親く、射山、主客あり
一斗、酒を命じて、飲ふ、且つ、山

寒山寺ハ南支那蘇州ノ地ニ在リ。圖誌ヲ案スルニ、寺ハ吳城ノ西六七里ノ地點ニ存シ、槽河ニ枕ミ、官道ニ沿ヒ、南北舟車ノ由ル處、寺邊ニ楓橋アリ、橋ニ上レバ以テ虎邱姑蘇城ヲ望ムベシ。寺堂ハ梁ノ武帝天監年間ニ創建サレ、元ト妙利普明塔院ト稱シ、又楓橋寺トモ言ヘリ。相傳フ、寒山拾得嘗テ此處ニ居レリ、寒山寺ノ名之レヨリ起ルト。唐ノ張繼韋應物等此ノ地ヲ經過シテ詩ヲ作り、寺名遂ニ著ハル。宋ノ國運隆興ノ際、節度使孫承祐、重浮圖七種ヲ添エ、雄潔偉麗ノ觀、爾後頓ニ加ハル。屢々兵燹ヲ經シト雖モ、隨ツテ焚クレバ隨ツテ修メ、以テ其ノ面目ヲ維持セリ。明ノ嘉靖年間、巨鐘ヲ鑄リテ鐘樓ヲ設ケ、萬曆四十年ニハ更ニ藏經閣ヲ建ツ。後六年ニシテ大殿火ヲ失セシモ明年復タ之ヲ修理ス。然ルニ清ノ咸豐年中、彼ノ髮賊ノ亂ニ依リテ寺院悉ク烏有ニ歸シ、鐘梵聲ヲ絶チ、今存スル所ノモノハ、弁陬狹小、貧弱ナル數僧ノ朝夕僅カニ香華ヲ捧クル有ルニ過ギズ。

我ガ明治盛世ノ折、越前ノ永平寺ニ於テ緋衣ノ格ヲ有セシ山田潤ナル者アリ、佛蹟踏破ノ志ヲ抱イテ彼ノ地ニ渡リ、後、蘇州ノ寒山寺ニ入りテ住職トナリ、自ラ寒山ト號ス。篆刻ノ名士ニシテ墨竹ヲ能ク畫ケリ。有名ナル山田寒山師ハ即チ此ノ人ニシテ、師ノ寒山寺ニ在ルヤ、寺院ノ荒廢其ノ極ニ達セルヲ悲シミ、歸國後新タニ寒山寺ヲ日本ニ建立セント企テ、靈地ヲ物色スルコト多年、漸ク伊豆ノ長岡ニ地ヲトシ、工其ノ緒ニ就キシモ、着後五年、不幸ニシテ歸幽シ、此ノ企テハ中絶ノ己ムナキニ至レリ。

之レヨリ先、現今ノ臨池界ニ於ケル大家米舩田口茂卿氏、明治十七年ノ頃、支那ニ遊ビテ當時ノ寒山寺主僧祖信ナル者

ト交ハリ、歸途ニ就クニ方リ、祖信ヨリ釋迦佛像一基ヲ贈ラレタレバ、歸來約四十餘年間、一日ノ如ク之ヲ奉安シ、而シテ氏モ亦タ日本寒山寺建立ノ志ヲ起セリ。氏ハ野州塩原ニ邸ヲ有セルヲ以テ、建寺ノ地ヲ一旦其處ニ撰ビシモ、一度奥多摩ニ杖ヲ曳クニ至リテ、皇都ヲ距ル僅カニ二十餘里ノ地ニ斯克ノ如キ佳境アルヲ知ラザリキ、塩原長靜ノ比ニアラズト激賞シ、寺院ヲ此地ニ建ツルニ決シ、青梅電氣鐵道會社々長小澤太平翁ニ諮リ、翁ノ提示セル奥多摩澤井鶴ノ瀨巖頭ヲ其ノ適地ト定メ、工ヲ起シテ三年、斯克テ日本寒山寺ヲ此地ニ建立セリ。

寒山寺ハ寺ニシテ寺ニアラス、從ツテ何レノ宗派ニモ屬セズ。今此ノ寺ニシテ寺ニアラザル超宗派ノ一寺ヲ支那ニ本尊ヲ受ケテ日本ニ建立ス。其ノ意蓋シ神佛崇敬ノ我ガ國民性ニ稽エ、思想善導、風教保持ノ念願ニ基ヅクモノナルベク、洵ニ當ヲ得タル美舉ト言ハザルベカラズ。古人曰ク、智者ハ動、仁者ハ靜、故ニ智者ハ水ヲ樂シミ、仁者ハ山ヲ愛スト。大日本寒山寺ノ在ル處、山幽ニシテ靜カニ、溪水潺々トシテ清ク、風光明媚、山水併セ得テ共ニ宜シク、智者ニ可、仁者ニモ亦可、而シテ今ヤ此處ニ由緒アル一字ヲ設ケ、且暮鐘聲ノ般々ヲ漏ラシ、名地更ニ一名物ヲ加ヘテ、之ヲ永ヘニ傳フ。奥多摩ノ佳境、春ノ花容ニ、夏ノ綠蔭ニ、秋ノ紅葉ニ、冬ノ白雪ニ、人ノ訪ヲ絶タズ、社會人心ノ上ニモ亦自ラ益スル所アラム。快ナル哉。之ヲ以テ大日本寒山寺由來ノ記トナス。

夕映や紅葉且つ散る鐘の聲

練也山人識

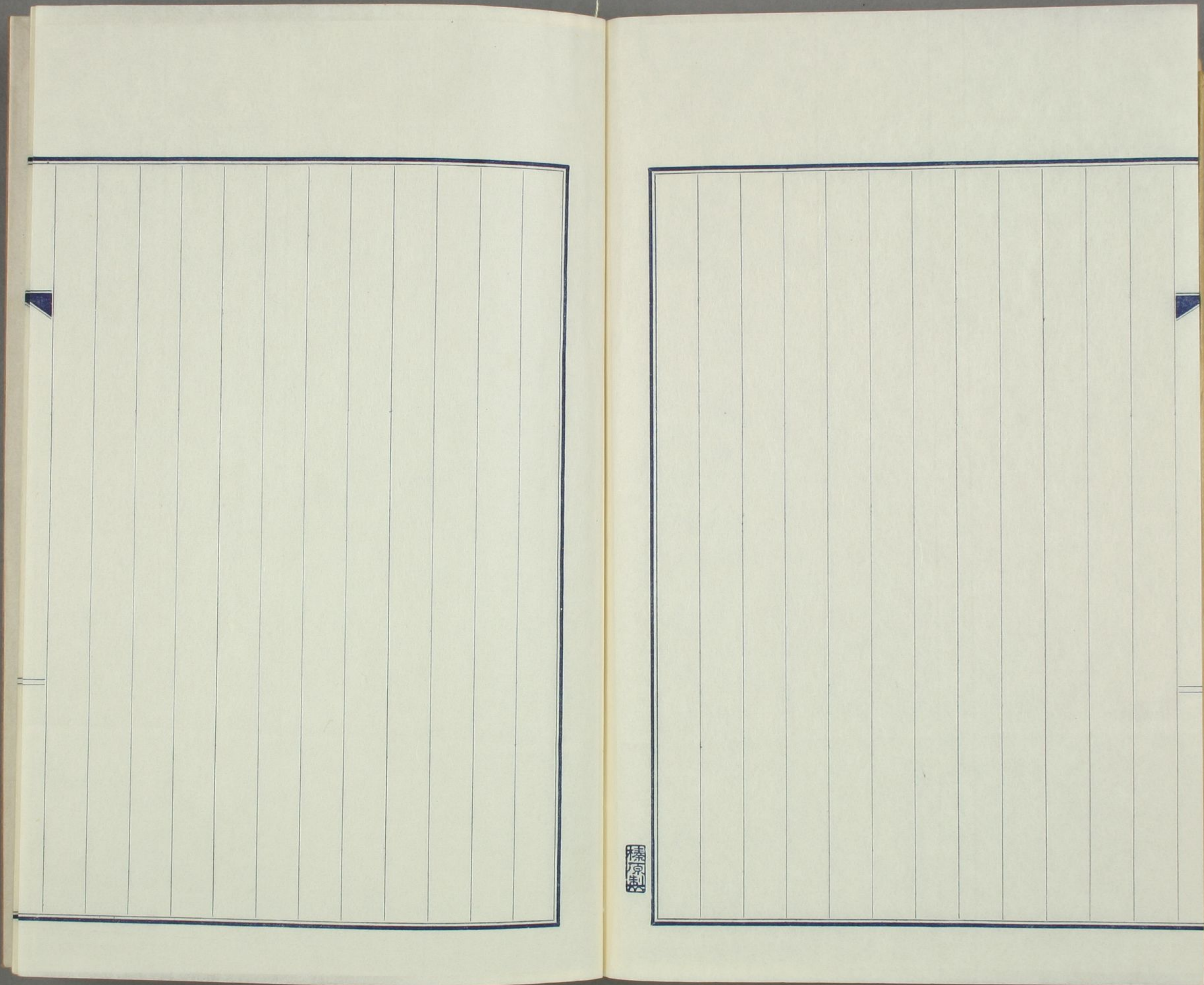
◎鳩の巢由來

明曆三年正月十九日江戸大火アリシ際老中松平伊豆守信綱ノ計劃ニ依リ市區改正ノ事業ト共ニ江戸城總曲輪ノ修築ヲ行フニ當リ出用材提供方ヲ當時ノ町奉行松波築後守正春ヨリ江戸ニテ有名ナル材木商大田某氏ニ命ゼラレタリ。同氏命ヲ奉ズルヤ諸所ヲ尋不良質ニシテ適材ヲ本郡氷川村日原ノ奥山並ニ甲州丹波山村ニ發見シ人夫ヲ督シテ之ヲ伐採スルコト、ハナリス、然ルニ當時ノコトナレバ道路トテ僅カニ人馬ノ業ズルニ過ギガハ程ナレバ其ノ運搬殆ト不可能ナリキ依リテ多摩川ヲ利用シテ之ヲ流木シ諸所ニ飯場帳場ヲ造リテ人夫ヲ督シ約年餘ヲ費セシトイフ。

今ノ鳩ノ巢ノ溪谷ニアル魚留瀧上ニ重積セル時ハ實ニ材木ノ山ヲ成セリトイヘリ、此處ニモ飯場小屋立チテ人夫及ビ係官ノ住居スルコト、ナリシガ其ノ時今モ在スル水神社ノ森ニ二羽ノ鳩來リテイトツシカ巢ヲ營ミ朝夕飼ヲ運フ様ノ實ニ睦シカリケレバ諸人之ヲ靈鳩トシテ愛護セリ。サレバ江戸ヨリノ使者及ビ人夫達ノ往復ノ際ニハイトツモ鳩ノ巢ノ處マデト命令シタリ又呼ビ合レテ常トセシトゾ、ソレガ因トナリテ殆ト地名ノ如ク今日ニ至ルマデ呼稱スル著名地トハナルナリ。

鳩乃家

この法を考へて、休憩時、飲物を疾走
五時半、衆と別れ、家へ帰る。十一月廿三日記



標原製

以下全て
白紙

